

♡恋人の妹の爆乳ロリ系グラドルに逆寝取られされちゃう話

「慎吾くん、もうすぐでご飯出来るよ」

「は、はい。ありがとうございます、先輩……」

「ふふふっ。もう、恋人なんだから敬語は使わなくていいのに」

「えっ、あっ、うん……」

大学の先輩で恋人の春香さんが一人暮らしする家。そこで僕は、エプロン姿の春香さんが手料理を作ってくれるのをテーブルで待っていた。

普段は流している長い綺麗な黒髪を料理の為にお団子にして、華奢な身体に白いエプロンをしたその様子は清廉瀟洒。席に着いて待っているだけで緊張してくる。

いや、緊張しているのはそれだけじゃない。僕は今日、初めて春香さんのアパートに上がらせてもらったのだ。その上、泊まりなのだ。緊張しないはずがない。

(もしかして今日……出来るのかな。い、一応泊まって行って良いよって言ってもらえたし……)

所属した文芸サークルで出会って一目惚れ。それから少しずつ仲良くなって僕の方から告白し、付き合い始めて今日でちょうど一年。しかし、僕らはまだ一度もセックスをしたことがなかった。

手を繋げるようになるまで三ヶ月、キスが出来るようになるまでは半年。周りの大学生カップルと比べると信じられないほどスローペースだ。

(まあ、僕が悪いんだけど……)

元々、普通の女性に慣れていない上に恋愛経験なんて皆無。春香さんが告白を受け入れてくれたのだって、奇跡なような幸運が味方してくれたからだ。

(沙耶華ちゃんの握手会とかにいくら通っていても、女性慣れはしなかったな……)

春香さんと出会う前の自分を思い出して、苦笑いする。

大学に入学して一目惚れするまで、僕はあるグラビアアイドルのファンだった。高校時代なんて、沙耶華ちゃんのVDや写真集、それから握手会などのイベントに行くお金欲しさに必死にアルバイトに励んだものだ。

僕より歳下でありながらクラスの女子とは比べものにならないほど豊満なおっぱい、しっかりとくびれが出来るほど胸は細いのに、お尻はむっちりと肉厚で上向き。

そんな大人顔負けな身体をしているのに身長は低く、顔はごろりと丸顔。ぱっちりとした大きな猫目と低めの鼻、ツンと澄ました唇。それらはどれもキュートで、黒髪をいつもツーサイドアップにしているのと合わせて「妹系ロリ巨乳グラドル」として売り出されていた彼女に、春香さんに出会う前の僕は夢中だった。

(それももう昔の話だけど……)

今でもアルバイトは続けているが、そのお金は春香さんとのデート代や、プレゼントの為に貯金している。

(食事の後、渡すぞ……そして、出来れば……)

懐に忍ばせた、ペンダントが入った小箱を指で撫でる。大学生の身分で買うにはかなり分不相応な値段だったが、付き合った日からこのプレゼントの為に貯金をしていたお陰で手に入れることが出来た。

(で、でも、プレゼントはともかくその後のことは……うまく誘えるかな……断られたら……うう……)

「慎吾くん？」

「えっ、あっ、はい！」

急に春香さんに声を掛けられ、思わず飛び上がってしまう。

「なあに？ そんなに驚いちゃって」

「い、いや……」

「そう？ もうご飯出来たから、お皿並べてもらってもいいかな？」

「はい！ もちろんです！」

「ふふふ。じゃあ、お願いね」

「わかりました！」

そう言って立ち上がり、食器棚へ向かおうとしたその時、玄関に誰かが入ってくる音がした。

「お姉ちゃん！ ごめん、今日泊めて〜！」

バタバタと靴を脱ぐ音と一緒に、そんな飛んでくる声。

「えっ？」

僕は、急な来客に呆気に取られてしまう。

「ああ……ごめんね、慎吾くん……。うちの妹、本当たまにこうやって遊びに来ちゃうの……」

僕の方を見ながら苦笑する春香さん。その表情は申し訳なきそうで、見ている僕の方がなんだか罪悪感を覚えてし

まう。

「いやいや！ 僕の方は大丈夫だよ。それより、もし迷惑なら僕は帰るけど……」

「ううん！ それは大丈夫。でも……本当にごめんね？」

「お姉ちゃん、いるんでしょー？ えっ、誰その人？もしかして彼氏？」

ドタドタと足音を立てながら部屋へ入ってきた妹さんは、僕を見るなり目を丸くしてそう言った。まさか来客が既にいるとは思っていなかったらしく、かなり驚いた様子だ。

「……えっ？」

しかし、それ以上に驚いたのは僕だ。

赤いリボンでツーサイドアップにした黒髪、あどけないながらも綺麗な目鼻立ち。制服のブレザーに身を包んでいてもわかる、はち切れそうなほど豊満な胸。ミニにした制服のチェックスカートから見える腿は眩いほど白く、スラツと伸びた足には紺のハイソックスを履かせている。

そこに立っていたのは、紛れもなく沙耶華ちゃんだった。



「なにっ？　きゃのこどジロジロ見て……」

「い、いえ……」

キッと睨みつけてきた視線から逃れるように、目を逸らす。どうやら、向こうは僕に気がついてないらしい。

(それもそうか……ファンの一人っただけだし、最近はいイベントにも行ってないし……)

ホッと安堵したような、それでいて寂しいような、複雑な心境だった。

「沙耶華、ちゃんとご挨拶しなきゃ駄目でしょう？　こちら、お姉ちゃんの大学の後輩で、お付き合っている慎吾さん」

「どうも……沙耶華……さん」

ペコリ、と頭を下げる。

その時一瞬、沙耶華ちゃんが訝しむような表情をしたのに気付き、冷や汗をかく。

「慎吾さん、こちらは私の妹の……」

「いいよお姉ちゃん、そういうの。はいはい、慎吾さんね、よろしく」

学生鞆をボン、と床に投げ、たわわに実ったおっぱいをテーブルに置いて当たり前のように席に着く沙耶華ちゃん。やっぱりどうやら僕のごとは覚えてないらしい。

(沙耶華ちゃんって、こんな子だったんだ……)

そんなことを考えながら、僕は食器棚から皿と箸を出してギンガムチェックのテーブルクロスが敷かれた卓に置き、沙耶華ちゃんの正面の席に着いた。緊張するが、隣に座るよりはマシだと考えた結果だ。

「でさー、今日のカメラマンがさー……」

「そう……それは大変ねえ」

三人でコの字型にテーブルを囲み、春香さんが作ってくれた夕飯をぐっ馳走になりながら姉妹の会話に耳を傾ける。二重の緊張を味わっているせいで肉じゃがの味も茄子の揚げ浸しの味もよくわからないが……。

(でも、春香さんってあんな表情もするんだ……)

愚痴っぽい話をする沙耶華ちゃん言葉に相槌を打ちながら、優しく微笑んでちゃんと受け止めている春香さん。その姿を見ると、沙耶華ちゃんが時々春香さんの元へ来るのも分かる気がした。

「それでー、この間ファンの人がー」

話題が今日の仕事の話から変わった時、僕の股間を何かが撫でた。

(うっ……?)

気のせいかと思って食事の続けようとする、さわさわと何かが股間を撫でてくる。やわらかさと、湿った布のような感触……。

パツと前を見ると、春香さんと話している沙耶華ちゃんの目が一瞬こちらを向き、口元をニヤリと意地悪く歪めた。僕の股間を撫でているのは、沙耶華ちゃんの足だ。

それを意識すると、急に触れられている部分が敏感になる。

(ま、まずいつて……)

目でそう訴えかけるも、既に沙耶華ちゃんは春香さんの方を向いていて全くこちらに気が付かない。

いや、違う。気が付いていて、僕が困っているのがわかっていて無視しているのだ。

(駄目だ……やめてくれそうにない……)

沙耶華ちゃんの足で撫でられているということを意識したせいで、ゆっくりと股間が膨らんできてしまっている。椅子を引いたり立ち上がったたりすれば春香さんに膨らみを見られてしまう恐れがあるから、迂闊に動けない。

テーブルクロスの裾が長い為、沙耶華ちゃんの脚は春香さんには見えないが、不審な僕の様子には気付くだろう。

(取り敢えず脚をどけなきゃ……)

手で沙耶華ちゃんの脚を払おうと、茶碗と箸を置く。

「あつ、慎吾くんお代わり?」

「えっ……と……はい」

僕が一旦食事を中断したのをお代わりと勘違いした春香さんが、コップと茶碗を持って席を立った。

「ねー、慎吾くんってさー、さやと会ったことあるよね?」

二人きりになったテーブルで、沙耶華ちゃんがこちらを向いて話しかけてきた。

「いや……」と、とぼけようとする、今度はふみふみと優しく紺ソに包んだ足の裏を股間に押し付けてきた。

「その顔、見覚えあるなー。慎吾くんって名前も確かに知ってるし」

「は、春香さんから僕の話聞いたことがあるんじゃないの……? うっ……」

すーっと股間の膨らみの先を親指で撫でられ、背筋に震えが走った。

「そんなわけないじゃん。もうさー、いい加減にトボけるのやめたら？」

可愛らしい猫目を鋭くし、呆れたような声を出す沙耶華ちゃん。落ち着き払った様子だが足の動きを止めることはなく、布越しに足の親指で裏筋をくすぐってくる。その度に甘い快感を受け、声が出そうになる。

(でもここでファンだったって認めたら、春香さんにバレちゃうよな……)

単純に「グラビアアイドルのファンだった」というだけなら春香さんも気にすることはないだろうが、そのアイドルが自分の妹となれば話は別だろう。

それも僕はただのファンではなく、かなりを熱を上げていた……いわゆるガチ恋勢だったということもあり、それが知られたら幻滅されるに決まっている。

どうしようか……。と考え込んでいると、春香さんが戻ってきてくれた。

「はい、慎吾くん。沙耶華と何話してたの？」

「別に」

答えたのは沙耶華ちゃんだった。そしてそのまま、再び席に着いた春香さんと何事もなかったかのように談笑を始める。

しかし脚の動きは止めることなく、むしろ先ほど以上に激しく僕の股間を刺激してくる。

(ううっ……沙耶華ちゃんの足使い、やばい……)

ズボンの上からだというのに的確にペニスを攻め立ててくる沙耶華ちゃんの脚。

竿の根元から裏スジまでをつま先で、すーっと撫でたり、くにくにと親指と人差し指を器用に動かして亀頭を摘んだりしてくる。

「ああっ……くう……」

あまりに甘く、意地悪な刺激を受けて、とうとう声が漏れてしまう。

「どうしたの？ 慎吾くん。お口に合わなかった？」

「いえ、そんなことはないです……」

「そう？ もしお腹痛かったら遠慮せず御手洗い使っていていいからね？」

「だ、大丈夫です……」

心配してくれる春香さんの奥で沙耶華ちゃんがこちらを見て、そっと人差し指を口の前に立てた。それは「バレないようにね」という無言のメッセージだ。

「お姉ちゃん、さつきからささやの話聞いたり慎吾さんのお世話で全然自分が食べてないじゃん。もっと食べなよ」

「ありがとう。じゃあ、お姉ちゃんも少しいただくわね」

沙耶華ちゃんに促されて、春香さんの意識が僕から食事に向かう。

(ば、バレないように助けてくれたのかな……?)

一瞬油断したところへ、今度はむぎゅっと足の裏全体でペニスを踏みつけてきてくる。

(あうっ……。これ、さつきよりマズイぞ……)

春香さんが沙耶華ちゃんの方ではなく料理の方に目を向けているせいで、横目ですぐ僕の方を見えるようになってし

まっている。

もしもここで不審な態度をとれば、すぐに見つかってしまう。そして、股間の膨らみを認められれば……。

(ダメだ……なんとか食事を無事に終えないと……。ううっ……)

僕の股間にべったりと押し付けていた足裏を、今度はグリグリと擦り付けてくる沙耶華ちゃん。勃起したペニスが勝手に押し返そうとする力に対してほどよい圧迫感を与えられ、僕は一瞬腰を跳ねさせてしまう。

「慎吾くん、本当に大丈夫？ さっきから顔色悪いけど」

「お姉ちゃんの手料理食べて緊張してるんじゃないの？ なんか冴えないドルオタっぽい見た目してるし、女の子の家で手料理食べた経験もなさそうだしね」

ニヤニヤと笑いながらこちらを見る沙耶華ちゃん。その目はいじめっ子特有の輝きを放っていて、明らかに僕が困っている様子を楽しんでいるのがわかる。

(な、なんだ……。このドキドキは……)

春香さんの家で食事をしている緊張ではない。僕の胸を支配しているのは、意地悪な沙耶華ちゃんの目に見つめられながら恋人に見つからないようにペニスを踏まれていることからくる興奮だ。

それを自覚して、ペニスはズボンの中で一層大きくなった。

「こら、慎吾さんを悪く言わないの」

「えー、わかんないじゃん。お姉ちゃんはその人が昔どんな趣味だったか聞いたことあるの？」

「あるわよ。慎吾さん、高校生の時から純文学が好きで、アルバイトもせずに本ばかり読んでいたんですって。そのお

げか、うちのサークルでもすごく良いもの書くんだから」

「へー。アルバイトもせずに本ばかりね。確かに、本は読んでそーな感じ」

髪の毛の先を指先にくるくると巻きつけながら、興味なさげに沙耶華ちゃんは話を流す。

しかし、「本は」というところを強調したアクセントは、明らかに僕へ向けた皮肉だ。

「もしかして本の他にDVDとかもよく見てたんじゃない？」

「あら、よくわかったわね。よく家で映画を見ていたんですって」

「本当に？ エッチなやつじゃないの？」

「こら。慎吾さんみたいな真面目な人が見るわけじゃないでしょう。だいたい、お姉ちゃんがそういうのが好きな人苦手なの知ってるでしょう？ 沙耶香のお仕事は応援してるけど……」

春香さんのその返答を聞いた沙耶華ちゃんが、ちらりとこちらを見て口角をニヤリと持ち上げた。それだけで背筋が寒くなり、ドキドキが強くなる。

(ま、マズイ………なんとか会話を中断させないと……)

少しずつ、僕が春香さんに吐いていた嘘を暴きにかかっている。もしも「ここで沙耶華ちゃんが」「この人、高校生の時に私のファンだったよ」と言っても証拠は何も無いが、僕の様子と合わせて不審がられる可能性は大いにある。

「あ、のっ、ううっ……!」

「えっ？ どうしたの？」

話題を変えようと声を掛けた瞬間、沙耶華ちゃんが両足で股間を挟んだ。ずっと甘い刺激で焦らされ続けてきたペ

ニスにその刺激はあまりに心地よく、くぷ、と我慢汗が漏れてしまったのを感じる。

「なに〜？ どうしたの？ おトイレなら行ってくれば？」

頬杖をつき、からかうような声色で言う沙耶華ちゃん。意地悪をされているのに、バレちゃいけないとわかっているのに、サディスティックな瞳に見つめられると情けなくペニスが足の裏に媚を売ってしまう。

「本当に大丈夫？ お手洗いなら、遠慮しなくて良いんだよ？」

「そーそー。もうぐっ馳走様して行ってくれば？」

そう言って沙耶華ちゃんがスツと脚を引き、僕の股間から足の裏を離した。どうやらこれ以上するつもりはないらしい。

「………すいません。ぐっ馳走様です」

春香さんに背を向けて股間を隠しながら立ち上がる瞬間、確かに沙耶華ちゃんは無言で唇を動かした。

（また、あとでね）と。

※

（あー……最悪だ。結局プレゼントは渡せなかったし、春香さんの手料理は残しちゃうし……）

勃起が治まるのを待ってから、トイレを出る。

「慎吾くん。もしかしてお姉ちゃん家のトイレでシコシコしちゃった？」

「わっ……。す、するわけないよ……」

ドアの前で待ち構えていた沙耶華ちゃんが、ツーサイドアップの毛先を指でいじりながら声をかけてきた。
(近くで見ると、本当におっぱい大きい……。それになんか、良い匂いもする……)

春に咲く花のような、甘い香り。それを嗅いでいると、またドキドキしてきた。

「な、何の用？ 僕もう戻るけど……」

しかし、そんなことが沙耶華ちゃんに知られたらまたからかわれると考え、素っ気ない対応をする。

「え〜？ つれないじゃん。昔はわざわざお金払って会いに来てくれたのにさ〜」

沙耶華ちゃんが一步こちらに踏み出してきて、自然と僕も一步下がる。

しかし、背後はトイレのドア。僕の背中が扉について逃げられなくなったところへ沙耶華ちゃんがもう一步踏み出してきて、壁ドンの姿勢になる。

(うっ、うわっ……。おっぱいむぎゅって……)

僕の方が背が高いせいで、ヘソの上あたりで思い切り沙耶華ちゃんのおっぱいを受け止めてしまう。制服越したというのにやわらかく、弾力のある爆乳。僕はその感触でまた股間を膨らませてしまう。

「別にさ〜、いじめてるわけじゃないんだよ？ 懐かしいファンの人に会えて嬉しいな〜ってだけで」

「ほ、本当に知らな、ああっ……」

むぎゅっ、とおっぱいを押し付けけながら、沙耶華ちゃんが僕の股間を指でくすぐった。

「トボけても良いことないじゃん？ 今ならお姉ちゃんは洗い物してるから声聞こえないし……」

「な、なんでこんな事……あぁっ……」

ピンクのマニキュアをした、綺麗に切り揃えられた右手の爪で僕のペニスをズボンの上からカリカリと甘搔きしてくる沙耶華ちゃん。先ほどまでの足での刺激以上に丁寧で優しいそれに、僕の腰は勝手に引いていってしまう。

「なんで？ んー、面白いからかなあ？」

「ほ、僕をいじめるのが……？ んんっ……」

カリカリ、カリカリとペニスをくすぐられ、ズボンの膨らみがはつきりと見えるほど大きくなる。

「まつさかー。さやはね、男の人がさやに夢中になっちゃうのを見てるのが最高に楽しいの。昔の慎吾くんみたいな男の人を見るのが、ね♡」

ニヤニヤと笑みを浮かべる沙耶華ちゃんについてと爪の先で竿を逆撫でされ、腰が抜けそうになる。しかし、背後の扉と正面から僕の体を抑えている沙耶華ちゃんの爆乳で、腰を抜かすことも出来ない。

「んんっ……はぁ、はぁ……」

「ほら、もう情けない顔しちゃってる。大好きなさやにおちんちん虐めてもらおうの嬉しいね♡」

「そ、そんなことっ……あぁっ……」

「ふうん。まだシラを切れると思ってるんだ？ 舐められてるのかなー？ じゃあ、ちょっと本気出しちゃおうっ」と

「ほ、ほんき……？」

一体何をするつもりなのか……と胸の鼓動が激しくなる。それが緊張なのか期待なのか、判別がつかないまま沙耶華ちゃんは僕の手を左手で取った。

そして、沙耶華ちゃんは僕の手を自分の胸に押し付けた

「うっ……わぁ……」

制服越しでも手のひらに伝わる爆乳の圧倒的なボリュームに、思わず気の抜けた声が出る。

あまりにも大きいおっぱいの中に手が沈みそうになる。制服のブレザーを着ているせいで実際には沈まないのだが、やわらかさと弾力は十分に感じられる。

(さ、沙耶華ちゃんのおっぱい触っちゃってる……！　今まで握手までしかしたことなかったのに……！)

いくら映像で揺れる様子やアップの写真で見たとしても、決して触れることは叶わなかった沙耶華ちゃんの爆乳。それに今、触れているという喜びが否応なく胸の内から湧き上がってくる。

(すぐ……やわらかくて、もっちりして……。このまま、揉んでみたい……)

一瞬そんなことを考えてしまい、すぐに邪な考えを振り払おうとする。

しかし、再びカリカリとペニスをズボンの上から引っ掻かれ、思考が乱されてしまう。それでもおっぱいの感触は確かに伝わってきて、僕の頭の中は爆乳の感触と甘搔きの刺激でいっぱいになる。

「ね、慎吾くん？　よく聞いてね？」

「う、うん……」

逃げなきゃ、こんな所を春香さんに見られたら……という考えさえ、おっぱいと甘搔きで簡単に消されてしまい、素直に返事をしてしまう。

「当たり前だけど、恋人の妹のおっぱいを揉んじゃうのは駄目だね？　でも、大好きなグラビアアイドルのおっぱい

を揉んじゃうのは仕方ないことだよね〜？ 慎吾くんがさやの大ファンだったこと認めるならこのまま、むぎゅって揉んでも良いんだよ〜？」

「も、揉んでも……？？」

「うんうん♡ 昔から応援してくれていたから特別サービス♡ でも、さやのこと知らない、恋人の妹でしかないっていうなら、手を離せるよね〜？」

そう言って、沙耶華ちゃんは僕の手を掴んで胸に押し付けていた左手を離した。

「ほらほら♡ 素直に認めたら揉んで良いんだよ♡ 何度も何度もさやのおっぱいでしこしこ無駄撃ちオナニーしちゃってたんでしょ？ じっくり握手会の際にさやの胸ばっかり見てたもんね？」

「あうう……」

駄目だ、駄目だ、駄目だ、と心の中で必死に言い聞かせる。

「すっごくやわらかいよ〜？ さやのおっぱい。きつと二度と忘れられなくなるよ♡ 今なら好きに揉めるんだよ？ 制服の上からでも指の隙間に入り込んで、手をメロメロにしてくれる天使のおっぱい、しっかり味わいたいよね〜？」

「そ、それはあ……」

駄目だ、駄目だ、駄目だ……。

必死に言い聞かせ、手をなんとか離そうとする。

そんな僕の必死さを嘲笑うように、沙耶華ちゃんはブレザーの中、シャツの胸元をクイ、と引っ張り、深々とした谷間を見せつけてきた。

「さや、今日下着つけてないんだよ♡」

クスリ、と笑いながら告白してくる沙耶華ちゃん。

その言葉は、まぎしくトドメの一撃だった。

「ああああっ……」

むぎゅつと、とうとう沙耶華ちゃんの大きなおっぱいを揉んでしまう。

(ああっ……なにこれ……手が全部幸せになるっ……!)

むっちりとやわらかで、手の中でもにゅもにゅと弾むおっぱい。下着をつけていないからなのか、制服の上からでも簡単に指が沈んでしまい、隙間から溢れそうになる。

揉んでいると自然と頬が緩み、奥歯がむず痒くなってきた。僕はもう、夢中になって何度もむにゅむにゅと沙耶華ちゃんの爆乳を揉みしだしてしまう。

「あはっ♡ やっと素直になってくれたね♡ 大好きなさやのおっぱい揉み揉みできて嬉しいね♡ 写真や映像じゃ、揉み心地まではわからないもんね♡」

「ううっ、うんっ。うんっ」

「一回揉んじやったらもう手を離したくなっちゃうでしょ。いいよいよ、そうやってさやに夢中になっちゃう男の情けない顔、さやは大好きだよ♡」

「ああっ……沙耶華ちゃんっ! 沙耶華ちゃん……!」

片手だけでなく、両手で驚掴みにするようにして爆乳を揉みしだく。もっちもちのおっぱいは、しっかり弾力があるせ

いでいくら揉んでも簡単に元の綺麗な形に戻っていく。

「ね？ さやのおっぱい最高でしょ？ 童貞丸出しの手つきで乱暴に揉まれてもハリがあるから全然垂れたりしないんだよ♡」

「うっうっ……ほんとうにすごい……」

揉んでも揉んでも飽きることがなく、ぽよんぽよんと跳ね返してくる弾力と、むにゅむにゅと指が沈む感触を永遠に味わっていたくなる。

しかし、終わりは唐突に訪れた。

「沙耶華？ 慎吾さん、まだお腹の調子悪そう？」

台所の方から、春香さんの声が聞こえてきた。いつのまにか洗い物を終えていたらしい。

「うん。まだ出ないみたい。お姉ちゃん先にお風呂はいいじゃないよ。さや、後でいいからさ」

沙耶華ちゃんが返事をしながら僕から距離を取り、顎で「トイレに入れ」と指示をしてくる。僕も春香さんに今の姿を見られたらまずいので、大人しく従う。

「……またね♡ 慎吾くん♡」

後ろ手でトイレのドアを開けて戻る時、にっこりと輝かしい笑顔を作って手を振ってくる沙耶華ちゃん。

それは、かつて握手会の最後にいつもしてくれていた、ファンサービスだった。

(あう……やっぱり沙耶華ちゃん可愛いな……。また今度、イベント行っても良いかもな……)

トイレのドアが閉まり切るまで、僕は自然と小さく手を振り返っていた。

※

「なんか、一番風呂は慎吾さんにくとか言ってたけど、説得したから今お姉ちゃんがお風呂はいつてるよ」

「あ、ありがとう……」

トイレから出て、再びテーブルで向き合って話す。手にはまだ先ほどのおっぱいの感触が残っていて、頭がふわふわしているのに、沙耶華ちゃんの方は何ともなさそうな態度だ。

「それでさ、さやのおっぱい触った手で、しこしこしちゃった？」

「し、してないよー！」

あまりにストレートな質問に狼狽える僕を見て、沙耶華ちゃんは「なくんだ、そうなの」とつまらなそうに言った。

「慎吾くんがさやのファン辞めちゃったのって、やっぱりお姉ちゃんと付き合い始めたから？」

頬杖をつき、たわわなおっぱいをテーブルに乗せた沙耶華ちゃんが尋ねてくる。僕を見つめる彼女の瞳には蠱惑的な光があった。

(た、谷間見えちゃってる……)

制服のワイシャツのボタンを三番目まで外した沙耶華ちゃんの、深々とした谷間。雪のように真っ白な乳肉も見えており、僕の目は釘付けになる。

(さ、さっきまでのおっぱいを揉んでんだ……)

爆乳の感触を味わい直すかのように、テーブルの下で手を握る。

「慎吾くん、目つきがやらし〜♡ さやのおっぱいのことしか考えられなくなっちゃった？」

「えっ、いいいや……」

指摘され、慌てて視線を逸らす。

「気にしないでいいのに〜♡ 恋人の妹のおっぱいに夢中になっちゃったら浮気だけど、大好きなグラビアアイドルのおっぱい見ちゃうのは仕方ないもん♡」

言いながら、頬杖を解いて両肘でむぎゅうつとおっぱいを挟み込む沙耶華ちゃん。圧迫されたおっぱいは今にも溢れそう。谷間はよりくつきりと見えてしまっている。いや、見せつけてきている。

「で、でも……」

ちら、ちら、と逸らした視線の横目で見てしまうのを止められない。

「ふふふ♡ やっぱおっぱい見ちゃうね〜♡ たくさん揺らしてあげるね♡ ほらっ、ぽよぽよ〜♡」

手のひらを胸の下に持って行き、沙耶華ちゃんがたぶたと乳房を揺らす。やわらかな爆乳は軽やかにふわりと持ち上がり、それから重量感たつぷりに落ちる。小刻みに跳ねる乳房の動きに、目が離せなくなる。

「こんなこともできるよ〜♡ むにゅむにゅ〜♡」

今度は手のひらでおっぱいをつかみ、自分で胸を揉む様子を見せつけてくる。もにゅもにゅと形を変え、すぐ元通りになるおっぱい。先ほど揉みしだいた時のことをはつきりと思い出してしまい、またドキドキが止まらなくなる。

「はぁ……はぁ……」

「あはは♡ 息が荒くなってきちゃったね♡ 慎吾くんみたいな童貞の男の子がきやのおっぱい見せつけられちゃったら、簡単におちんちんおつきくして媚び売っちゃうよね♡ お姉ちゃんじゃこんな風におっぱい揺らして夢中にさせてくれないもんね♡」

おっぱいを揺らしながら、また足を伸ばして僕の股間に触れてきた。ズボンの下のペニスは、すっかり大きくなってしまっている。

「や、やめ……」

抵抗しようと椅子を引き、足から離れる。

その時、懐に忍ばせていた小箱が落ち、テーブルの下に入ってしまう。

「あっ」

「うん？ 何これ？」

慌てて僕が取ろうとするより早く、沙耶華ちゃんがテーブルの下に潜り込んで取ってしまう。

「中身は……ティファ○ーのペンダントじゃん。へえ、これハートがロケットになっていて中に写真とか入れられるんだ」

テーブルの下に潜り込んだ沙耶華ちゃんが、僕の脚の間から顔を出す。フローリングに膝をつき、ちょうど僕の股間の高さに胸がくる姿勢だ。

「もしかして、これ、お姉ちゃんへのプレゼント？」

キラキラと光る、ピンクゴールドのロケットペンダントを手に持ってニヤニヤとからかうように笑う沙耶華ちゃん。その表情は、新しいおもちゃを見つけた子供のようだった。

「そ、そうだよ……。返してよ……」

「うん、返してあげても良いんだけど、簡単に返すんじゃないよね♡」

には、と笑顔を作った沙耶華ちゃんが、春香さんへのプレゼントだったロケットペンダントを首に掛けてしまう。

「な、なに……。うわあ……」

沙耶華ちゃんがペンダントをつけると、ロケットがたわわなおっぱいの上にぽよん、と乗った。

「このロケットを、たくさんおっぱいで挟んであげちゃうのっ♡」

乳房を持ち、開いた谷間にロケットを仕舞い込む沙耶華ちゃん。

そして、横乳をブレザーの上から持ち、ペンダントのロケットをむにむにすりすり谷間の中でもみくちやにした。

「す、すごい……。それ、エッチ……」

「えへへ♡ でしょ♡ ロケット相手に擬似パイズリ♡ 見てるだけでおちんちんビクビクしちゃってるもんね♡」

おっぱいの中で溺れるロケット。僕の脚の間で繰り広げられるそのいやらしい様子を見ると、まるで自分がパイズリされているかのような錯覚に陥ってしまう。

春香さんに贈るネックレスを勝手につけられておっぱいで押し潰されているのに、全く嫌悪感は湧かない。それどころか言いようのない興奮を覚えてしまっている。

(い、いいな……。僕もあのやわらかいおっぱいで……)

先ほど実際に胸を揉ませてもらったから、おっぱいのやわらかさを知ってしまっている。そのせいで、ロケットでの擬似パイズリのやわらかさや心地よさも鮮明に想像してしまう。

(うう……沙耶華ちゃんのおっぱい……沙耶華ちゃんのパイズリ……)

ズボンの中でギチギチに硬くなったペニスに触れたくてたまらない。今すぐ目の前の光景をオカズにオナニーに耽りたい。そんな欲求が湧き上がるのを止められない。

「あはは♡ もうすっかりさやのおっぱいに釘付け♡ 目が離せないね♡ この後一人で、さやの擬似パイズリ思い出してしこしこしちゃうんでしょ♡」

「うう……し、しない……」

嘘だ。本当は今すぐにでもしたい。

「そんなこと言ってる♡ 瞬きもしないで目に焼き付けようとしちゃってるじゃん♡」

「そ、それより、返してよ……」

「じゃあさあ……ううっよか♡」

沙耶華ちゃんが手の動きを止め、谷間からぶるん、とロケットを取り出す。

「ね、さやにこれ似合ってる?」

沙耶華ちゃんの白い首に掛かるピンクゴールドのチェーン、胸元に乗ったハートのロケット。

童顔でありながら魅力的な肉体をしている沙耶華ちゃんの絶妙な雰囲気、ロケットペンダントは際立たせていた。

「に、似合ってるよ……」

沙耶華ちゃんの雰囲気呑まれ、自然と素直に答えてしまう。「しまった」と思ったのは、僕の返事を聞いた沙耶華ちゃんの猫目が意地悪く光ってからだだった。

「さや、これ欲しいなあ♡」

「だ、ダメだよ！ それは今日、春香さんに渡す予定の物で……！」

二人で撮った写真をいつでも春香さんが見ることができるよう、思い出をいつでも春香さんが肌身離さず持っているように、と考えて選んだプレゼントなのだ。

しかし、沙耶華ちゃんは鼻で笑い、チェーンを引いてロケットを持ち上げた。

「わかってるよ、そんなこと。だから欲しいんじゃない♡」

摘み上げたハートのロケットに舌を伸ばす沙耶華ちゃん。長くて肉厚、真っ赤で健康的な舌は唾液でてらてらと妖しく光沢を帯び、舌先には唾液の雫が溜まっている。

「さやにちゅっ♡」

沙耶華ちゃんが、れろお……とハートに舌を這わせる。舌の動きを思わず目で追い、見ているだけでペニスがビクビクと反応する。

僕のズボンの膨らみが動いたのを見逃さなかった沙耶華ちゃんが、ピンク色の潤んだ唇でハートにちゅっときスをする。「もちろん、タダでは言わないよ。これがとっても高いペンダントなの、さやも知ってるし。だからさ……これをくれるなら、さやがパイズリしてあげる♡」

「えっ……！」

パイズリ、という言葉に胸と股間が跳ねてしまう。驚きではなく、期待で。

「もうすっかりパンパンになっちゃった慎吾くんのおちんちん、さやのおっぱいでむぎゅって挟んで、もにゅもにゅってたく

さんぽふぽふしてあげる♡ このペンダントはその代金♡ ね？ それならいいでしょう？」

「だ、ダメだよ……あうっ……」

沙耶華ちゃんがずし、とおっぱいを僕の太ももに乗せ、腰が引ける。

制服に包まれていても、下着をつけていなせいか極上のやわらかさを伝えてくる下乳。それでいながらずっしりとした重量感を覚え、へへへこと腰を振りそうになる。

「ダメとか言っておきながら、ちよっとおっぱい乗せてあげただけで腰跳ねちゃってるね♡ どう？ さやの生乳に挟まれて、好きだけ射精したくないの？」

「で、でも、ペンダント……」

「ペンダントなんてまた買えばいいじゃん♡ さやのおっぱいでパイズリしてもらえる機会なんて、人生で二度とないかもしれないんだよ？ ほーらっ♡ 大人しくお姉ちゃんへのプレゼント、さやに渡して気持ち良くなっちゃえ♡」

沙耶華ちゃんが手を乳房の上に置き、ずしずしと圧を掛けてくる。ボリュームのある爆乳が腿にのし掛かってきて、思考が蕩けていく。

(それでも、それでも……)

今日渡す為に一年前から、付き合った日からずっとアルバイトをしてきていたのだ。

その努力と春香さんへの想いをこんなところで無駄にするわけには……。

「慎吾くん♡」

そう言って、僕の手を取って両手で包み込む沙耶華ちゃん。

これは、いつも握手会でしてくれた握手の仕方で……。

この後に来る言葉は……。

「だーいすぎだよっ♡」

「うううっー！」

一発で心を奪いに来るエンジェルスマイル。あの日、興味本位で買った写真集を見た僕をガチ恋勢に墮とした満面の笑顔。

それを間近で見せられて、理性的になることは出来なかった。

「沙耶華ちゃん♡ 沙耶華ちゃん好きっ♡ ペンダントあげるからっ、だからっ、パイズリしてえ♡」

自分から腰を動かし、沙耶華ちゃんの下乳に腿を擦り付けながら懇願する。

「あはは♡ ありがとうっ♡ そ・れ・じ・ゃ・あ♡ さやのふわふわもちおっぱいでメロメロにしてあげるねっ♡」

ブレザーを脱ぎ捨て、シャツのボタンを片手で一個ずつ外していく沙耶華ちゃん。

全てのシャツが外れ、窮屈なシャツから解放された爆乳がぼるんっ跳ねる。その動きと共に、制服や谷間の中に閉じ込められていた濃密なミルク臭が香る。

「おっきいでしょっ♡ さやのおっぱい♡ 大ファンだった慎吾くんなら、数値もわかるよね？」

「き、九十三センチのGカップ……」

沙耶華ちゃんのスリーサイズは完全に暗記していた。今でもスラスラと出てきたことに自分でも驚いたが。

「ブー。それは昔のさや。今のさやはねっ、百センチのIカップなんだよ♡ 慎吾くんが知らないうちに成長してるんだ

から♡」

からかうように笑いながら、おっぱいを持ち上げて豊満なバストを見せつけてくる沙耶華ちゃん。そのおっぱいに見惚れていると、ある物に気が付いた。

「そ、それは……?」

露わになった沙耶華ちゃんの爆乳。それは真っ赤なハート型のニップレスをしていて、扇情的だ。

「これは、今日の撮影で使ったやつ♡ つけたまま帰ってきた♡ 下着してないと言ったけど、裸とは言っていないもんね♡」

「うう……」

「大丈夫だよ♡ パイズリには関係ないから♡ それじゃ、慎吾くんもおちんちん出しちゃおうね♡」

沙耶華ちゃんが前歯でジーツとズボンのチャックを下ろす。そして僕のパンツをグイと引っ張ると、屹立しきったペニスガボロン、と現れた。

「うっわあ♡ 我慢汁ですっかりテカっちゃってくさくさい♡ ビクビクしてる♡ さやのおっぱいが恋しくて仕方なかったんだね♡」

「うんっ♡ うんっ♡」

素直に答える。もう恥も我慢も投げ捨てて沙耶華ちゃんのおっぱいを求めてしまう。頷くたび、胸がドキドキして心地いい。

「ねーねー、ファンだった時はさやのおっぱいで一日何回くらいしこしこしてたの?」

「ぐ、五回……」

「えー、そんなに♡ シュ猿じゃん♡ それじゃあ、お姉ちゃんとはもう何回エッチしたの？」

「し、したいけどまだしてない……」

「そうだよね♡ お姉ちゃん、そういうのに潔癖だし。じゃあ、さやのおっぱいで童貞卒業しちゃおうね♡ もう一度とお姉ちゃんとエッチしたくなっちゃうけど、さやのガチ恋勢だから問題ないよね♡」

「それはっ、ああっ……♡」

僕が返事を言い切るよりも早く、沙耶華ちゃんがおっぱいの谷間に僕のペニスを仕舞い込んでしまった。

「どうかな？ さやのIカップおっぱいで挟まれて幸せになっちゃった？」

「しあわせっ♡ しあわせですっ♡」

みちみちに脂肪が詰まったおっぱいに挟まれ、むっちりとやわらかい乳肉がカリをくすぐり、くびれに入り込み、亀頭を包み込む。

それらの快感を一度に与えられ、脚がガクガクと震え出す。

「あはは♡ さやのおっぱい大きすぎて、慎吾くんのおちんちん見えなくなっちゃったね♡ ぜーんぶ、くまなく気持ち良くしてあげるから、思う存分さやのこと好きになっちゃってね♡」

「うんんっ♡」

むにゅっつと、谷間に僕のペニスを入れたまま左右から挟み込んでくる沙耶華ちゃん。優しく締め付けてくる乳圧に、射精感がこみ上げる。

「おっぱいの中で亀頭ひくひくしちゃってるね〜♡ もう限界？ まだ挟んであげただけなんだから頑張れ〜♡ もっともつと気持ち良くなりたいでしょ？」

「なりたいつ♡ なりたいつ♡」

我慢する、と続けようとした言葉は、おっぱいから与えられる快楽に飲まれて声にならなかった。

「ぱふぱふ♡♡ ぱふぱふ♡♡ さやのおっぱいの中でおちんちん蕩けちゃえ〜♡ 我慢汁とおっぱいに溺れるの気持ちいいね〜♡」

むぎゅ、むぎゅ、むぎゅ、と連続してリズムカルに谷間の中で乳房を押し付けられる。その度にぐちゅぐちゅと水音が立ち、我慢汁と乳肉がペニスに絡みついてくる。

くびれに入り込んだ乳肉がカリ裏をくすぐりながら抜けていく感触。直後、くにゅっとまた乳肉が滑り込んでくる刺激。

キメ細かく、ハリのあるおっぱいだからこそ生まれる快感に、僕は夢中になる。

「沙耶華ちゃんっ♡ それ、弱い……♡」

思考が蕩け、思ったことがそのまま口から出てしまう。

「自分から弱点教えちゃうなんて情けな〜♡ もっとやって欲しいってことだよね？ ぱふぱふ♡♡ ぱふぱふ♡♡ 「あううっ……だめえ……♡」

「ダメじゃないでしょー♡ シコ猿ちんちんおっきくして射精懇願しちゃってるのわかってるよ〜♡ さやのおっぱいの虜になって、おバカさんになろうね〜♡ おちんちんと脳みそに、おっぱいに負ける気持ちよき刻みつけてあげる♡」

硬くなったペニスをほぐすように乳圧を連続して掛けてくる。体から力が抜け、どんどん蕩けていく。

「おっぱい……♡ おっぱい気持ちいい……♡」

「わかってるよ♡ 顔がすっかりおバカさんになっちゃってるもん♡ 頬が緩んで、目が熱っぽくて……さやのことが大好き♡ 顔しちゃうてるの、見えてるよ♡ もう二度と正気に戻れなくなって、さやのガチ恋勢でいられるように、♡ とんおっぱいで負けさせてあげる♡」

「ま、負けちゃっ♡」

「嬉しそうに負けたがるね、慎吾くん♡ お姉ちゃんみたいな貧相な身体には反応しないのに、さやの爆乳見たら簡単におちんちんおっ勃てて言いなりになれるようにしてあげるからね♡」

むぎゅうつと強めに乳圧を掛けてペニスをギチギチに硬めたあと、リズムカルなぽぽふで蕩かせてくる、極上のパイズリ。気持ち良くてたまらないのに、あまりに優しい快感なせいですぐには射精出来ない。

「したいっ♡ 射精したいよっ♡ 負けたいのっ♡」

情けなく懇願し、自分で腰を振ってペニスを乳房に擦りつけたり、乳肉に亀頭を沈めたりする。

「ごっらっ♡ 勝手に動いちゃダメ♡ さやのおっぱいが慎吾くんの物になったんじゃない、慎吾くんがさやの物になっちゃったんだから。ほらっ、むぎゅー♡」

僕の腰が勝手に動かないように、下乳をたぶん、と股間に乗せ、押し付けてくる。そのずっしりとした重量感と、抑え付けてくる圧力で腰が動かさなくなる。

「むぎゅっ♡ むぎゅっ♡ おちんちんだけじゃなく、腰までおっぱいで包めちゃいそう♡」

ペニスの根元、腿の付け根、それらに下乳を擦り付けてきて、むにむにとやわらかさを伝えてくる。下腹部がじんわり熱くなり、睾丸が持ち上がってきた。

「いきたいっ♡ 思い切りおっぱいに負けたいっ♡」

テーブルクロスを必死に掴み、動かせない下半身を震わせて懇願する。

「まだまだ♡ これからが楽しいんだから♡♡」

一体これから何があるのか、と蕩けた脳みそで考えていると、沙耶華ちゃんが「テーブル引いて♡」と上目遣いで可愛らしくおねだりしてきた。

彼女の言葉に従い、テーブルを引っ張って沙耶華ちゃんの姿と僕の下半身がすっかり隠れたその時、春香さんが戻ってきた。

「あら、慎吾くん一人？ 沙耶華は？」

「うっ、えっと……えーと……と、トイレかもしれません。んんっ♡」

お風呂上がりでパジャマ姿の春香さん。石鹸の爽やかな匂いとシャンプーの甘い匂いがする。

(まずい、まずいよ沙耶華ちゃん……！)

春香さんが部屋に来ていることは沙耶華ちゃんもわかっているはずなのに、パイズリをやめてくれない。

それどころか、さっきまでは優しくペニスにばふばふをしてきたり、乳圧を掛けてきたり、射精させることよりも快楽を与えるのが主目的の動きだったのに、今はズリズリと射精させる為に交互に乳房を擦り付けてくる。

「沙耶華も？ もしかして、今日のご飯が悪かったのかしら？」

幸い、春香さんはまだ気付いていない様子で、僕の隣に立っている。しかし、もしテーブルクロスを片付けたり、テーブルを元の位置に戻したりすれば、僕が沙耶華ちゃんにパイズリされているところが見られてしまう。

(や、やばい……こんなのっ……)

バレないように、不審がられないように、必死に平静を装うとしているのを、沙耶華ちゃんがパイズリで邪魔してくる。

「そ、そんなことないですよ……うっ……」

「そう？　慎吾くんも少し顔色悪いし……」

「だ、大丈夫です……んんっ……」

ズリズリと交互に乳房が擦れるたびに、くちゅくちゅくちゅと水音が立つ。それが春香さんに聞こえてしまうのではないかという緊張で心臓が破裂しそうだった。

その上、緊張して神経が張り詰めているせいで感覚が鋭くなり、さっきまで以上にパイズリの快楽をはっきり感じてしまう。

「ほ、本当に大丈夫？　顔色悪いし、うめき声も……」

「へ、平気ですんんっ♡ ああっ♡」

唐突に強烈な快感を与えられ、背筋にゾクゾクと震えが走る。脳みそが溶け、視界が一瞬真っ白になるほどだった。

「ああっ……♡ くう……♡」

テーブルに突っ伏し、腕で顔を隠しながら上半身で下半身を隠す。

(い、今のまたやられたらあ……♡)

まず間違いなく春香さんに見られながら射精してしまうだろうという確信があった。

そして、一瞬考えてしまう。

春香さんの目の前で沙耶華ちゃんに射精させられたら、どれだけ気持ちいいのだろうか、と。

「そ、そんなにお腹痛いの？ 待っててね、近くにドラッグストアあるからお薬買ってくるね」

そう言って、パジャマに上着だけ羽織って慌てて出て行く春香さん。僕はその後ろ姿を見て深いため息をついた。それが、安堵なのか落胆なのかはわからない。

「ごんねくん♡ お姉ちゃんの前で『浮気射精』させてあげたかったのに♡」

テーブルの下から聞こえてくる、楽しそうな声。ケタケタと笑うその声は本当に楽しそうで、どこまでもサディスティックな響きを含んでいた。

「でもこれで二人つきり♡ 気にせずたつきさん気持ち良くなれるね♡」

テーブルを押し、沙耶華ちゃんが姿を表す。豊満な彼女の胸の中にはまだ僕のペニスが見え隠れしている。

「あ、危なかったよ♡」

「んふふ♡ でもドキドキして興奮したでしょ♡ 慎吾くんのおちんちん、すごい反応良かったもん♡」

「そ、それはあんなことするからっ♡」

先ほど、一瞬だけ受けた強烈な快感を思い出す。射精させる為でも、蕩けさせる為でもない、完全に負けさせるためだけの暴力的な快感を。

「あんなことっ？ もしかして、これのことかな？」

沙耶華ちゃんが意地悪な笑みを浮かべながらペニスの上にどたぶん、とおっぱいを押し付けてくる。そして、下乳に亀頭やカリ、くびれと言った敏感な部分を沈めたあと、グイッと身体を引いた。

「これえっ♡ これ、死んじゃうっ♡」

敏感な部分が、液体と錯覚するほどやわらかい下乳に包み込まれてから一気に擦られる快感。弾力、摩擦、重量感。爆乳の武器をこれでもかと生かした性技を複数の性感帯で同時に受けて、腰が抜ける。

「これこれちゃうと、みんな頭スカスカになってお漏らししちゃうんだよね♡ ほらほらっ♡ 慎吾くんも情けなく敗北お漏らししちゃういなよっ♡」

もっちりとやわらかく、ずっしりと重たい。沙耶華ちゃんの爆乳でなければ出来ない下乳圧迫ズリを受けて、思考が能力が奪われていく。

そして、脳内に残ったのは「とにかく気持ち良く浮気射精したい」ということだけ。

「あうっ♡ 気持ちいいっ♡ 気持ちいいよっ♡ したいっ♡ 浮気射精したいっ♡」

「完全におバカさんになれたね♡ もうおちんちんもずーっとビクビクして我慢汁漏らしちゃってる♡ こっちもおバカさんになっちゃったのかな？」

「うんっ♡ もうバカになっちゃったからあ♡ おっぱいにおちんちんバカにされちゃったのっ♡」

二人きりの家で思い切り叫びながら、ひたすらパイズリされる。それはとても幸福で、甘美な快樂だった。

「それじゃあ、そろそろかな♡ とびきり気持ちいい浮気射精させてあげるからね♡」

「うんっ♡ お願いっ♡ お願いしますっ♡」

いよいよ射精させてもらえる。それも、とびきり気持ちいい浮気射精を。

僕は期待と興奮で胸がいっぱいだった。

「い〜くよ〜♡ みちみちのおっぱいでぎゅぎゅぎゅうに締め付けてあげるから、腰抜かしちゃわないように気をつけてね♡
もう、言っても遅いと思うけど♡」

谷間の中にペニスが押し込められ、完全に隙間なく爆乳に包まれる。

キメ細やかな肌はすべすべで、やわらかな乳肉はにゅるにゅると絡みついてくる。

「あうう……おっぱいオムツ好き……♡」

「うわ……。自分で何言ってるか分かってんの？ まいっか。ここまでバカになれたなら、どこまでも気持ちよくなれちゃうだろうし♡ そうなればさやにメロメロだもんね♡」

僕のうわ言を嘲笑いながら、乳肉がみっちりペニスに絡みついておっぱいを思い切り圧迫する沙耶華ちゃん。腕を交差させているせいで、先ほどまでとは比べ物にならない乳圧だ。

「んおおお……♡」

「下品な声出ちゃってる♡ おちんちんもおっぱいの中で先っぽ膨らみ始めて敗北準備完了しちゃってるね♡ 後戻りできなくなるって分かっているのに気持ちいい♡ 浮気だって分かっているのに射精♡ でも仕方ないよね。慎吾くんみたいなおっぱいマゾは、どんなにダメって思ってもおっぱいには勝てないんだもんね♡」

「勝てないっ♡ 勝ちたくないのっ♡」

みちみちと爆乳で締め付けられ、射精感が込み上げてくる。いや、もう精液が尿道を登ってきている。それなのに、あ

まりに乳圧が強すぎるために尿道が狭まり、鈴口までなかなか精液が辿り着かないのだ。

「これすごいでしょ♡ みんな、こうやっておちんちんを挟み潰してあげると、さやのおっぱいでしか射精できなくなっちゃうんだよ♡ 外側はおっぱいに包まれて幸せになっちゃうって、内側は精液が尿道を押し広げながらゆ〜っくり登ってくるのがクセになっちゃうんだって♡ こんなにやわらかくておっきくて、ぎゅうぎゅう締め付けてくれるの、さやのおっぱいくらいしかないんだよ♡ 誰とエッチしても、パイズリしてもらっても、さやじゃないなら射精出来ないガチ恋ちゃんぽになっちゃうおうね♡ お返事は？」

「なりますっ♡ なりますっ♡ させてくださいっ♡」

もはや春香さんのことなんて忘れ、必死に快楽を貪る。

(あともうすこし♡ もう少しで出るっ♡)

狭まった尿道を押し広げながら、塊のような精液がすぐそこまで登ってきているのを感じる。

もし今、沙耶華ちゃんがおっぱいを離れたら一気に吹き出してしまおうだろう。

「ふふ〜ん♡ じゃあ教えて？ 慎吾くんが大好きで、一生幸せにしたいのは誰？ 慎吾くんのごことは好きだけど性格が良いだけで体は貧相、パイズリも出来ないお姉ちゃん？ それとも、慎吾くんのごことなんて全然好きじゃないけど、おっぱい大きくて気持ちいい浮気パイズリさせてくれるさや？ ねえどっち？」

そんなの、考えるまでもなかった。

「沙耶華ちゃん♡ 沙耶華ちゃんが好きっ♡ 大好きですっ♡ 一生ガチ恋勢でいますっ♡」

家中に響くほどの声で叫ぶ。精液ももう鈴口のすぐそこまで来ている。

「だつてさ〜♡ お・ね・え・ちゃ・ん♡」

そう言つて沙耶華ちゃんがテーブルクロスをひっぺがした。

ドサ、と部屋の入り口で音がする。

そちらを見ると、ドラッグストアに行ったはずの春香さんが立っていた。

「やだっ♡ 見ないでっ♡ 春香さん見ないでっ♡」

せめて射精しないように、と思う間も無く、もはや止めることも出来ずに白濁液が噴き出す。

どびゅるるるるっ♡♡ びゅるるるるるっ♡♡ どびゅどびゅっ♡♡♡♡



「ああああっ♡ とまんっ♡ しゃせーとまんないっ♡ きもちいいのっ♡ みないでっ♡」
青ざめた顔で僕を見る春香さん。

悲しませていると分かっているのに、最低だと分かっているのに、春香さんに見られながら浮気射精してしまっていることがたまらなく気持ちよかった。

「きもちいいっ♡ さやかちゃんすきっ♡ さやかちゃんっ♡ さやかちゃんっ♡」

精液と一緒に、溶けた脳みそまで嘔き出していくようだった。春香さんに見られながら沙耶華ちゃんの名を叫んで浮気射精して、幸せを感じていた。

「慎吾くん……うそ……」

「あはは♡ ごめんね♡お姉ちゃん♡ お姉ちゃんの彼氏、奪っちゃった♡ それで、この通りもうすっかりおっぱいやなきや射精出来ないおバカさんにしちゃったの♡ だから今夜は外で寝てきてよ♡ 慎吾くんはさやのおっぱいに無駄撃ちマゾ射精するのに忙しいからさ♡ ねー？ 慎吾くん♡」

「おっぱい♡ おっぱいもっと♡ 尻尾代わりにマゾちんちんふりふりするからたくさんいじめてほしいですっ♡」

「はいはい♡ お姉ちゃんと別れて浮いたデート代でまたたくさんお金使ってくれるように、おちんちんたくさんおっぱいしてあげるからね♡ もう一度パイズリで敗北射精させてあげた後は一緒にお風呂入ろうね♡ おっぱいでしっかり洗ってあげる♡ 夜はおっぱい吸いながら寝ていいよ♡ そして朝になったらまたパイズリで敗北射精♡ 大学行く時間もバイトして、ぜくんぶ私のプレゼントやグッズ買うためのお金にしちゃうくらいのお貢ぎガチ恋勢に墮としてあげる♡」

「はっ♡ はっ♡」

春香さんに見られながらの浮気射精。この快楽を知ってしまった僕は、もう二度と真つ当な恋愛はできないのだろう。しかし、それでもよかった。僕は、沙耶華ちゃんのガチ恋勢なのだから……………。

※

あの日から、僕は一度も大学は行けていない。春香さんと会ってしまうのを避けているのもあるが、それ以上に沙耶華ちゃんに貢ぐ為のお金を稼ぐのに忙殺されているのだ。

ちゃんと大学に行かないと行けない。春香さんに謝らないといけない。そう思っているのに…………。

「あはっ♡ 慎吾くん、さやに見下されて踏まれるの、悔しくないの〜?」

「うあああ…………♡」

意地悪な笑みを浮かべながら僕のペニスを紺ソ足裏でグリグリと足蹴にする沙耶華ちゃん。彼女の笑顔を見る度、こうやって快感を与えられる度、心が彼女から離れられなくなっていく。

「なっさけない顔♡ そんなお顔はおっぱいで隠してあげるね♡」

むぎゅ、とペニスを踏み潰されながら、沙耶華ちゃんの大きなおっぱいの中に顔を埋められてしまう。

あの日、沙耶華ちゃんのおっぱいでパイズリ浮気射精してしまっただけ以来、これをされると何も考えられなくなってしまった。もうようになつた。

おっぱいの中に顔を閉じ込められてしまうのと同時に、彼女に心まで囚われてしまう。

「おっぱいの匂い嗅ぎながら先っぽ踏まれてドピュドピュしようね〜♡」

「ああああっ♡」

どっぴん♡♡♡ どっぴん♡♡♡

「あはっ♡ あっけなく♡ さやのこと、更に大好きになっちゃったね〜♡」

ペニスを更にグリグリと踏まれ、白濁液を全て吐き出せられる。あまりの快感で腰が抜け、理性は蕩け、おっぱいの中から出してもらっても自立することすら出来ない。

「きゃは♡ 今日のお貢ぎはクリスチャン・オブタンのリップだ〜♡ それも五本も……ありがとね♡」

一本で一万三千円もするブランド物のリップをその場であけ、唇に塗る沙耶華ちゃん。彼女の手つきは手慣れたもので、その値段に対する恐れや緊張はなさそうだった。

一方で僕は高価なプレゼントを受け取ってもらえたと言う喜びと、さらに沙耶華ちゃんに貢いでしまったという背徳感で胸を高揚させていた。

不安も、懸念も、なにかも蕩けていくような快樂。

何も考えず、ただひたすら快樂を与えられてスカスカになった頭の中に、ドロドロの背徳感が満ちていく歪んだ幸福感。

「これからもずっと、さやのファンで居てね♡ ちゅっ♡」

ルーージュでセクシーな紅になった唇をぷるん、と震わせながら沙耶華ちゃんが言い、僕の頬にキスをした。

僕はもう、これから先何があっても沙耶華ちゃんのファンでいるのだろう。

敗北の証である頬のリップマークを指でさすりながら、僕は残った理性でそんなことを考えていた。

♡父の内縁の妻のおっぱいに負けて遺産を奪われちゃったマゾ赤ちゃんのお話

遅く生まれた俺を男手一つで育ててくれた父が亡くなり、四十九日も終わった日の朝、俺は我慢の限界を迎えていた。

「瑞樹さん、いい加減に出て行ってくれないか。今日は俺も大学の手続きで一度東京に戻らないといけないし」

居間にある俺と父の思い出の食卓を我が物顔で使い、コーヒーを啜りながらファッション雑誌をめくっている六つほど年上の女性に言う。

「あら、どうしてかな？」

マグカップを置き、雑誌をたたんでこちらに尋ねてくる瑞樹さん。白いリブ生地のスーターで上半身を包み、ジーンズを履いたラフな格好でテーブルに豊満な胸を乗せてくつろいでいる姿は、まるでここが自分の家だといわんばかりで俺の神経を苛立たせる。

「お父さんが亡くなった今だからこそ、私がハヤト君のそばに居るべきだと思ったんだけど……違ったかな？」

三つ編みのルーズサイドテールにした艶やかな黒髪の前髪をかきあげ、細い眉を八の字にして小首を傾げながら尋ねてくるその姿は、アラサーとは思えないほど可愛らしかった。

（いや、騙されちゃダメだ。この女は親父の遺産目当てなんだから）

もの心つく前に母を亡くした俺は父に育てられ、東京の大学に進学までさせてもらった。そして俺が東京で一人暮らしをしている間に、この女は父に取り入って家に入出入りしていたと言うのだ。所謂、内縁の妻だ。



しかし、そんな関係だと知ったのは父の葬式の際で、俺はそれまでこの女の存在すら知らなかった。

正直言って、親父が残した遺産はかなりのものだった。実家とその土地、ほとんど手つかずの退職金、それから死亡保険。大学の学費をそこから出しても、まだかなり余裕がある。この女の狙いがそれらなのは、明らかだった。

(そうでなければ、父の生前に面識がなかった俺にこうして近づいてくるはずもない)

父と縁のある人間という事で当初は置いていたが、もうその情もなかった。

「もっと私を頼っても良いんだよ？ ハヤト君が望むなら、『ママ』になってあげる」

ママ、という言葉聞いて一瞬感情を揺さぶられるが、深呼吸をすることでなんとか冷静さを取り戻す。

「俺と貴女は無関係な人間ですし、こちらもこれ以上親類でもない貴女を置いておくわけにはいかないんです」

ぴしやりとそう言ったのけると、瑞樹さんは視線を落とし、ぷっくりした薄ピンク色の唇に人差し指を添えて考え込み始めた。

「でも、出て行くこうにもここは私も住んでいた家だから、何処へも行くあてなんて……。そうだ、いっそ『ママ』がずっと暮らしてあげるっていうのはどうかなあ？」

ドン、と拳でテーブルを叩く。コーヒが入っているマグカップが一度跳ねるほどの衝撃だったが、幸い割れたり溢れたりしなかった。

「父さんは確かに貴女を住まわせていたかもしれないけど、もうこの家と土地は俺が相続しています。これ以上居座るなら法的手段を取りますよ」

相手の事情なんて鑑みず、こちらの意見を通す。こうでもしなければのらりくらりと躲かれて、結局何も解決しない

ことをこの数日で俺は学んでいた。

「そんなあ。私はただ、お母さんもお父さんも亡くしちゃったハヤト君の『ママ』になってあげたいだけなのに」
「貴女は俺の母親じゃない！」

声を荒げて否定する。それでようやく、瑞樹さんは口を閉じてくれた。

はあはあと肩で息をして、外見だけでも冷静を取り繕う。

「とにかく、二日以内には出て行ってもらいます。休みが明けたら俺もこの家から大学に通いますから」
そう言った俺は返事も待たずに踵を返して居間を後にし、駅へと向かったのだった。

※

(早く出て行け……か。ちょっと、生意気)

ハヤトが部屋から出て行き、一人残った居間で冷めきったコーヒーを啜る。

内縁の夫だったハヤトの父親は、結局最後まで自分と籍を入れることはしなかった。自慢の胸と性技で色仕掛けをして骨抜きには出来たものの、そこだけは譲らずに亡くなってしまったのだ。

その理由を、葬儀の際に知った。一人息子であるハヤトの存在。自分には知らされていなかった、遺産の正当な相続人。ハヤトの父親は、若い女の豊満な肢体に溺れながらも最期まで父親だったのだ。

意志の強い人だった、と思う。立派な男だったとも思う。

(でも、そんな格好いい所は息子さんには受け継がれてないみたいですよ♡)

マグカップから唇を離し、胸の内でもくそ笑む。

(あんなに敵意剥き出しで出て行けなんて言いながら、ちらちら私の胸見ちゃってたし……♡ 優しいママがしっかり『おはなし』したら、きつとわかってくれそう♡)

数々の男を籠絡してきた自慢の肉体。今日だって、ニットの下はノーブラでたわわに実ったおっぱいのやわらかさを強調しているし、大きくて上向きのお尻を少しキツめのジーンズに包ませることでシルエットを際立たせている。

今日だけじゃない。この家でハヤトと生活するようになってからはそうやって、時に露出の多い格好で、時に胸を強調した格好で、彼の目を惹いていた。そんな生活をふた月近くも続けていたのだ。効果は如実に表れていた。

当初は警戒と気まずさからか、ほとんど口を利こうとしなかったハヤトだが、今では先ほどのように自分から話し掛けに来ている。そして、そんな時は決まって胸やお尻、脚に視線を感じるのだった。

(わざわざ出て行けって言いに来たってことは、それだけ意識しちゃってるってことだよな。それなら、今夜あたり……♡)

じつくり、二人きりで話をしよう……。口元についたコーヒートを真っ赤な舌で舐めとりながら、密かに決意を固めるのだった。

※

「どう？　美味しいかな？」

「ああ、そうですね」

大学のある東京から帰ってきて夜。瑞樹さんと向き合って食卓で夕食をとる。瑞樹さんが作ったカレーライスは、確かに美味しかった。

(それでも、父さんが作ってくれたのには及ばないけど)

初めて口にした瑞樹さんの手料理を前に、内心そんなことを思いながらスプーンを進めていく。

そもそも、瑞樹さんと食事をすること自体初めてだった。今日も一人で済ませるつもりで、顔を合わせる事もしたくなつたのだが、向こうから誘ってきた上に「しっかり話を聞いて、ハヤト君が一人でも大丈夫だって安心したら荷物をまとめて出て行くから」と言い出したので了承したのだ。

「ハヤト君は、料理できるのかな？」

「しますよ。父さんの帰りが遅い日は自分で作ってたので。父さんがこんなことになるまでは大学の近くで一人暮らしだったし」

「そっかあ。料理はできるんだ」

にこやかな笑みを浮かべながら、俺がカレーライスを食べるのを眺めている瑞樹さん。

俺はその視線から早く逃れたくてスプーンを口に運ぶ手を急がせる。

「こら、そんなに急いで食べたらつかえちゃうよ。もっと味わって食べて欲しいな」

(んなこと言われても……)

妙齡の女性でありながら崩れたところが一切ないプロポーションと、大人らしさと可愛らしさを同居させた顔立ちの瑞樹さんと向かい合って食事をするのは緊張した。

対面に座っている瑞樹さんの、白いセーターに包まれた豊満なおっぱい。それは今、思い出の食卓の上にたぶん、と乗せられている。

元々大きな乳房は、膨張色である白のセーターのせいで余計に際立って大きく見える。瑞樹さんがそれを抱えるように両腕を食卓につけている。そのせいで少し体を動かすだけでも、もにゅもにゅとおっぱいがやわらかそうに潰れる様子が見えてしまう。

(見ちゃダメだ……。きつと、父さんにもこうやって近付いたんだ……)

頭ではそう意識しているのに、いや、意識しているからこそだろうか。視線は胸が動くたびにそちらへ誘われてしまう。ただの食事なら、早く食べ終えて席を立てばいい。いや、食事中でも残してしまえばいいのだが、瑞樹さんと話して安心させなければ目的は達成できないのだ。

「家事は俺もできますし、心配してもらおうことなんてないですよ」

「でもお……この家から大学に通うのはちょっと大変でしょう？
新幹線通学になっちゃう。そしたら、家事をする暇もないんじゃないかな」

「バイトしなくてよくなった分、土日纏めてやりますよ」

平静を装いながら返事をしているが、ちよつとでも油断すると胸を凝視してしまいそうできかしく気が抜けない。

今も机の上にぽよん、と乗っかって、腕の中でむにゅゅと圧迫されている豊満なおっぱい。腕に抱えられてはいるも

の、大きすぎて収まりきっていない分は溢れてしまっている。

「やっぱり心配だなあ……。まだ学生だから生きてるだけでどれだけお金がかかるかわからないでしょ？」

両肘を食卓につけて、重ねた手の甲に顎を乗せた瑞樹さんがぼやく。

肘に挟まれたおっぱいはぎゅっと圧迫されて、ニット越しなのに谷間の線が見えてしまう。それが、服の生地が大きな乳房の谷間に挟み込まれて生まれたものだど悟ると、ある疑問が浮かんだ。

(瑞樹さん、もしかして下着をつけてないのか?)

そう考えた瞬間から、急に興奮が高まっていく。胸がドキドキして、股間がにわか膨らむを感じる。

(冷静になれ……。意識しちやダメだ、見ちやダメだ……)

自分に言い聞かせながら、必死に視線を泳がせる。どこか、瑞樹さんの方を見ずに済む方向を……。

(なっ……!)

そうして俺は見てしまう。胸を見るまいとして向けた視線の先、居間の窓際に角ハンガーで干されたブラジャーの数々を。

「あ、ごめんね? 荷物を片付けている時に、とりあえず全部洗濯してから取り込んでそのままにしたの」

「そう、なんですすね」

視線はブラジャーに釘付けになったまま、上の空で返事をする。

俺の顔がすっぱり入ってしまいそうなほど大きなカップのブラジャー。角ハンガーの洗濯バサミは、全てブラジャーに使われていた。

色とりどりで目に美しいそれらの中には、セクシーランジェリーと呼ばれるような、エナメル生地の光沢のある紫の物や、乳房の先の部分にだけスリットが入った物もある。

(あ、あんなのを着けてたのか……?)

グラビアアイドル顔負けのプロポーションをしている瑞樹さんがセクシーランジェリーを身につけている姿をうっかり想像してしまう。

「どうしたの、ハヤト君？ 手が止まってるよ？」

「あ、いや……」

身を乗り出して顔を近づけて来た瑞樹さんの方へ向き直る。

すると、あの大きなブラジャーでなければ収まらないおっぱいがすぐそこにあることを意識してしまう。

瑞樹さんが身を乗り出したせいでテーブルに乗せられていたおっぱいは今、宙ぶらりんになっていた。重力に導かれて白いニットを内側から伸ばしている大きな乳房。そのサイズもさることながら、少しだらしなく垂れた様子からやわらかさと重さがうかがい知れる。

(待てよ……? 全部洗濯したってことは本当に今は下着をつけてないんじゃないか……?)

ブラジャーで支えられていたなら、いくら大きくて重くてもここまで重力に従わないだろう。瑞樹さんのノーブラ疑惑が、にわかに信憑性を帯び始める。

温かい白色のニットの布一枚隔てた向こう側にある、俺の顔よりも大きいであろう瑞樹さんの巨乳を思い描いてしま

「どうしたのかな？ もうお腹いっぱい？ それとも……」

ん？ と小首を傾げて俺の目を覗き込みながら尋ねてくる瑞樹さん。見つめられる気まずさから逃げようと視線を向けた先は、彼女の豊満なおっぱいだった。

「おっぱいが気になって、ご飯に集中できないのかな？」

「なっ……！」

凶星を突いてくる言葉に思わず取り乱し、スプーンを落としてしまう。

「あら、ダメじゃない。一人でご飯も食べられないの？」

怒りとは違う理由で顔が真っ赤になっている俺に、瑞樹さんがスプーンでカレーをすくって食べさせようとしてくる。

「ママ、ちゃんとハヤト君がご飯を食べられないと安心出来ないなあ……。はい、あーん♡」

口を閉じ、もう胸を見ないように目も閉じて首を背ける。

すると、ほんの少ししてから後頭部と首筋をやわらかいものに包まれた。

「ふあ……」

急なことに声が漏れてしまう。いきなり死角から触れたこと以上に、そのやわらかさと重量感に驚いた。

「ハヤト君、わかる？ これがママのおっぱいの♡ まだまだ子どものハヤト君は、カレーよりもおっぱいが欲しかったのかなあ？」

柔らかな肌触りのリブ生地の手拭きタオル越しに、豊満なおっぱいの谷間に顔を仕舞い込まれる。「お前なんか母親じゃない」と言いたいのには、セーターから香る甘い匂いとおっぱいのやわらかな感触のせいで力が抜けて上手く話せない。

「やわらかくておっきいママのおっぱいを当てられちゃって力抜けちゃったのかなあ？　こんな調子じゃハヤト君を残してお家出られないな」

谷間の中へずぶずぶと沈められ、ニットに包まれた乳房で両頬をくすぐられる。瑞樹さんが両手でおっぱいを持って俺の頬を撫でているのだ。

(やめろって、言わないと……)

抵抗して振り払わないといけない。それなのに、怒りが微塵も湧いてこなくて力が抜けてしまう。

「す〜りす〜り♡　おっぱいす〜り♡　男の子はおっぱいでお顔包んであげるとすぐ力が抜けちゃうから単純だね♡」

バカにされていることに一瞬怒りを覚えるも、乳房で頬をひと撫でされただけでそれすら忘れてしまう。頭では抵抗したいと思っているのに、食事中にチラ見してしまったりブラジャーを目にしてみたりしたことでおっぱいを意識していたせいで、心が勝手に喜んでしまっていた。

「ハヤトくん♡　おっぱいを見ちゃったの、さっきだけじゃないよねえ？　今朝も、昨日も、私がこの家に来てからいっつもおっぱい見ちゃったでしょ〜？」

瑞樹さんの言葉に一瞬たじろぐ。確かに瑞樹さんを警戒したり悪感情を抱いたりする一方で、魅力的な肉体に目を奪われることは度々あった。

しかしそれを素直に認めてしまうと、もう二度と瑞樹さんに逆らえなくなってしまう。そんな予感が確かにあった。

「そ、そんなことお……」

だから、自分でも分かるほどとろけた力の籠ってない声で返事をした。

「そんなことない？ 本当に〜？」

「ほ、ほんとに……」

嘘だ。実は見ただけじゃなく、際どい格好をしている瑞樹さんの姿を目に焼き付けて自慰をした事もある。それも、一度ではない。

「おっぱいを見られたのが私の勘違いで、ハヤト君は子どもじゃなくておっぱいなんて気にならないって言うなら〜、どうしておちんちん大きくなっちゃてるのかなあ？」

その言葉に、心臓が飛び出るほどびっくりする。俺の背後に立っておっぱいを後頭部に押し付けている瑞樹さんから、俺の股間の膨らみが丸見えなのだったのだ。

今更隠すわけにもいかず、かといって認めるわけにもいかず、俺はやわらかな豊胸に沈んだまま何も答えられない。

「ちやあんと教えてほしいなあ♡ もしもハヤト君が私のおっぱいを見ておちんちん大きくしちゃうようなよわ〜い男の子だったら、安心して出て行けないもん♡」

(うう……出て行ってもらわなきゃ……)

そうだ、瑞樹さんを安心させないとこの家と父の財産は守れないのだ……。俺はその為にわざわざこうして二人で食事をして、おっぱいを意識しちゃって……。

「ん〜？ やっぱりハヤト君はおっぱい大好きで簡単に負けちゃう弱い赤ちゃんなのかなあ？ そんな子にお家とお父さんの遺産は任せられないな〜？」

後頭部からおっぱいに包まれた状態でほよん♡ ほよん♡ ふに♡ ふに♡ と左右から乳房で優しく頬を撫でられ、首筋がぞくぞくしてくる。

(ちゃんと、ちゃんとと言わないと……)

「全然抵抗できないね♡♡ 出て行けって行ってきた時もおっぱい見ちゃってたもんね♡♡」

全くの凶星だった。意を決して出て行くように伝えに行った今朝、ニットに身を包んだ瑞樹さんのおっぱいに俺は視線を奪われてしまっていた。

「おっぱい見てる時に『ママ』って言われたから、怒るふりして誤魔化してたんでしょ？ テーブルを叩いた時におっぱいも揺れちゃってたの見たもんね♡ そんな情けない子にはママがついてないとダメだよね♡♡」

(あ、あううう……)

サラサラで肌触りの良いセーターに包まれたふわふわのおっぱいで顔だけを撫でられ続け、怒りも思考もとろけていってしまう。股間はズボンが窮屈なほど膨らんでしまっていて、刺激を求めている。

(おっぱいに、おっぱいに負けちゃう……)

心が瑞樹さんのおっぱいに屈服しかけたその時だった。

「お父さんも私のおっぱいに簡単に負けちゃったし、ハヤト君もおっぱいに負けちゃうし、親子揃って情けない赤ちゃんでちゅね♡♡ そんなにママのおっぱいが恋しかったんでちゅか♡？ 男の人だけで暮らしてたから、おっぱいに弱くなっちゃったのかなあ？」

父を侮辱したその言葉に、一気に怒りが溢れてくる。頭に血が上って燃えるほどになり、逆に全身が冷えていく感覚

がどれだけその怒りが激しいのかを物語っている。

「父さんを馬鹿にするな！」

気付けば叫び、瑞樹の身体を振り払っていた。

「お前に父さんの何がわかる！　ほんの少し一緒に居ただけのお前に！」

椅子から立ち上がって振り返り、瑞樹を正面から睨みつけて怒号をあげる。

「だいたい、父さんはお前に負けなかった！　だからこうして俺だけが遺産を相続してるんだろう！　負けたのはお前の方だ！」

そうだ。父さんはこの女に狙われながらも、最後まで俺を想ってくれていたのだ。俺にだけこの家と財産を残してくれたのだ。

ここで俺が負けてしまえば、その意志を無駄にする事になる。それを思うと、力が湧いてきた。

「出て行け！　俺はお前の言う通りにはならない！　この家も財産もお前には渡さない！」

目をまっすぐ見据えながら、その後も怒りをぶつけ続ける。

俺の言葉に怯んだ様子のない瑞樹は、それでも黙って怒りをぶつけられるままになっていた。

しかし、一瞬視線を俺の股間に落としてから、笑った。

「なんだかかっこいいこと言ってるけど、おちんちんおっきくしたまま怒っても説得力ないな〜♡」

「なっ……！！」

こんな時でもまだ膨らんだままなのか？　そう思って自分の股間を確認しようとして下を向いた瞬間……。

「あはっ♡ だ〜まき〜れた〜♡」

下を向いた隙に腕を後頭部に回され、そのまま顔を正面から胸に沈められてしまう。

「こんな簡単に騙されちゃうなんて、やっぱり男の子って単純〜♡ どうちてそんなに怒ってたんでちゅか〜？ おっぱいもらえなくてお腹空いてたんでちゅか〜？」

ふくよかな胸に顔面を押し付けられ、頭をよしよしと撫でられる。たったそれだけで怒りが急速に萎んでいってしまった。

「ぱっぱっ♡ ぱっぱっ♡ はい、しっかり深呼吸してママの匂い覚えましょうね〜♡ お父さんを馬鹿にされてカッコよく怒ってたのに、おっぱいにはぱっぱっされて撫で撫でされるだけで簡単に負けちゃうね〜♡」

服の上からでもわかる、豊満な乳房のやわらかさ。弾力をもって押し返してくるのではなく、どこまでも優しく沈んで受け止めてくれる感触に、段々と身体の力が抜けていく。

(それに……この、匂いが……っ)

嗅いでいると勝手に唾液が溢れてきて脳みそがほわほわしてくる甘い香り。ニットにしっかり染み付いたそれを嗅がされると、本当に股間がまた膨らんでしまう。いや、膨らむだけでなく、先端がぬめり始めているのを確かに感じる。

「どんなに頭に血を登らせて怒っても、ちょっとおっぱいで優しくしてあげるとおちんちんに血が行っちゃって怒れなくなるの、本当に情けないね〜♡ これじゃあ安心して出て行けないな〜♡」

着衣おっぱいに顔を包まれながら頭を撫でられ、匂いを嗅がされる。すると、何も考えられなくなって代りに何故か

安心感を覚えてしまう。

抜け出さないといけないという事も、ここで自分が負けたら父の努力が水泡に帰すことも、頭ではわかっている。しかし心はすっかり安らいでしまい、おっぱいにずっと甘えていたいと思ってしまう。

(おっぱい、おっぱい……)

立っていることもできなくなり、瑞樹さんの身体にしがみついて膝立ちになるのがやっとだった。それでも顔からおっぱいを離してもらえず、俺はひたすらやわらかな乳肉の感触を顔面で受け続ける。

「ハヤトくん？ もう一度訊くね。ハヤト君は私のおっぱいに見惚れちゃうような情けない男の子？ それともそれは私の勘違いで、本当のハヤト君はおっぱいなんかには負けない、一人でお家も遺産も守れる男の人？」

これが瑞樹さんを追い出す最後のチャンスであることを、直感的に悟る。ここでもし拒絶できなければ、瑞樹さんの魅力的な巨乳でいつまでも言うことを聞かされて遺産を管理されてしまう。それだけは、避けなければならぬ。

「ほおら、ちゃんと答えて私を安心させて？」

俺の頬を両手で持った瑞樹さんが、目と目を合わせるように顔を持ち上げてきた。

にこやかな雰囲気纏ってはいいるが口元には狡猾な捕食者の笑みを浮かべた彼女に、俺はなんとか答える。

「おっぱいなんか、見てません……」

言うてから、心に一抹の寂しさと無念を覚える。まるで、ずっとこのまま瑞樹さんのおっぱいに籠絡され続けることを望んでいたかのように。

「そっかそっか。私の勘違いだったんだあ♡ 立派なお父さんの血を引いてるハヤト君が、おっぱいなんかには負けるわけ

ないもんね♡」

言いながら、俺の身体を自分から引き剥がす瑞樹さん。もちろん、布一枚隔てたすぐそばにあったおっぱいも離れていってしまう。

それを目で追うのをやめることは、出来なかった。

「あれあれ？ やっぱり今おっぱい見ちゃってたよね？ おかしいなあ……。ハヤト君はおっぱいに負けたりしない強い男の子のはずなのに……」

「あつ、今の、は……」

正面から向かい合い、目を合わせていたのだ。その視線を胸に向けてしまえば、当然気付かれる。こんな単純なことですら、瑞樹さんの豊乳に魅了された頭では考えられなかった。

「今のは勘違いじゃないよね？ ハヤト君って実はおっぱい大好きな上に嘘つきな男の子だったのかなあ？ そんな子を置いて出て行くのは心配だなあ……。♡」

しまった、振り出しだ。折角振り絞って「見てない」と答えて瑞樹さんを追い出せそうだったのに、おっぱいに釣られてしまったせいで無駄にってしまった。

そんな苦々しい思いはしかし所詮思考だけで、心の方は「もしかしたらもう一度おっぱいで……」と期待してしまっている。

（違う……！ 俺は期待なんかしていない……！）

必死にそう言い聞かせて自分を奮い立たせても、瑞樹さんが「もう一回、おっぱいになんて負けないってところを見せて

ほしいな♡」と一言口にするだけでドキドキしてしまっ。

「今度はセーターの上からじゃなくて、直接おっぱいでぶっぶっしてあげるね♡ それでも負けなかったら、安心して（のお家を出て行けるな）」

（直接おっぱいで……）

その言葉を聞いた途端、一気に心臓が破裂しそうなほど興奮する。呼吸は荒く、浅いものになり、視線はすっかり瑞樹さんの豊乳に釘付けだ。

（違う……これは、おっぱいを期待してるんじゃないやなくて、もうすぐ追い出せるってことを期待してるんだ……）

心の中で誰にとも知れない言い訳をしながら、瑞樹さんがゆっくりセーターを捲っていくのを待つ。

瑞樹さんが俺のすぐ目の前で、腕をお腹の位置で交差させてセーターの裾を捲り上げていく。真っ白で薄いお腹が先ず見え、それからおへそを露出し……。

そうして、白くて大きな乳房の下半分だけを俺に見せつけた。

（し、下着つけてない……）

予想通り……いや、期待通りブラジャーを着けていない事に嬉しくなってしまう。同時に、自分は先ほどまで本当に布一枚隔てただけの乳房に顔を包まれていたのだという事を自覚する。

そうなるともう、目の前のおっぱいに直接触れられたらどれだけ気持ちいいのか……という事しか考えられなかった。

（お、おっぱい……。瑞樹さんの、なまおっぱい……）

たゆんと僅かに垂れた下乳は、内側に詰まった脂肪の量と重さ、そして思わず揉みしだきたくなるやわらかさを物

語っていた。

そんな魅力的な左右の下乳の谷間に生まれた小さな三角形の隙間。瑞樹さんの甘い香りが漂ってくるそこに誘われるように、首を伸ばしてしまう。

「ふふふ♡ ハヤト君は私がノーブラなことに気付いてたかな？ 気付いてたよね？ あんなにおっぱい見てたんだもん♡」

「み、見てない……」

今まきにおっぱいを凝視してしまっているのに、口では否定する。説得力なんて微塵もないだろうが、それでも認めるわけにはいかなかった。

「そうだったね。ノーブラおっぱいに全然興味なかったようなしっかり者のハヤト君は、直接おっぱいを顔に乗せられても負けないよね♡」

一歩だけ俺の方へ近づいた瑞樹さんが、露出した下乳を俺の顔のすぐ真上に持ってくる。ふわん、と香るミルク臭に反応して口の中に唾液が分泌され、鼻は開きっぱなしになる。

「はい、ハヤト君のお顔におっぱい乗せちゃうね♡ ずっとノーブラでセーターを着てたからおっぱいフェロモンがたっぷり籠っちゃってるけど、負けないところしっかり見せてね♡ ちゃんと跳ね除けられたら、おっぱいに負けなかったって認めてあげるからね♡」

笑顔でそう言った直後、瑞樹さんが俺の顔に乳房を落とした。

谷間に鼻が挟まるようにおっぱいを乗せられ、下乳に顔を覆われる。しっかり脂肪が詰まった重量感たっぷりのおっ

ぱいは、自重だけで俺の顔にのしかかってくる。

(おっぱい、おっぱい、すげー……っ)

すべすべぶるぶるの乳肌がしつとりと吸い付いてくる感触に思わず息を飲む。やわらかな乳房は瑞樹さんに押し付けられたりせずとも、重力に従って俺の顔を圧迫してくる。弾力よりもやわらかさが勝っている低反発枕のようなおっぱいに隙間なく顔を包まれ、自分が沈んでいくような錯覚さえ覚えた。

「ぱいぱい♡ ぱいぱい♡ むぎゅーっ♡ ママのおっきなおっぱいでお顔潰されちゃうのどうかな？」

どうもこうもなかった。ハリや弾力が弱いせいでほとんど液体のような下乳のやわらかさはまさに極上で、それに顔を包まれていると歯がじんわり浮くような感覚がする。それに伴って全身の力は抜けていき、ただ乗せられているだけのおっぱいを跳ね除けることができない。

「どうしたのかなあ？ まさか降参じゃないよね？ しっかり者のハヤト君はあ、おっぱいなんかには負けないんでしょっ？」

思考も身体の手もすっかり蕩けているのに、ペニスだけは痛いほど屹立し、硬くなっていた。

(この匂い……おっぱいの匂い……)

谷間に籠った、甘い香り。瑞樹さんがおっぱいフェロモンと呼んだそれは、間違いなく確かにフェロモンだった。雄を誘惑し、発情させる雌の香り。

豊満な乳房の谷間に鼻が挟まっているせいで、呼吸をするだけでフェロモンが流れ込んできて発情を誘ってくる。

(嗅いじゃいけないのに……ダメなのに……)

呼吸を止めればそれだけで防げるはずの発情フェロモン。ひたすら匂いに溺れようとする心を必死に抑えて息を止める。

「しっかり深呼吸しようね〜♡ すー♡ すー♡ はー♡ 強い強いハヤト君は、おっぱいの匂いなんて気にならな
いもんね〜?」

「すううう……」

瑞樹さんの言葉に促されたら、必死の思いで止めた呼吸も簡単に再開してしまった。それも、先ほどまでよりずっと深い呼吸で。

「おっぱいの匂い嗅いでどんどん脳みそとろけちゃうね〜♡ おっぱい払い除けられないと負けになっちゃうのに力入らないね〜♡」

悔しいはずなのに、負けちゃいけないとわかっているはずなのに、瑞樹さんの言葉の通り何も考えられなくて力も入らない。下着は既に我慢汁でぐっしょりだ。

「ぱふぱふ♡ ぱふぱふ♡ 自分でおっぱい払い除けられないのかなあ? それじゃあ、今からする事に耐えられたらおっぱいに負けなかったって認めてあげるね♡」

(こ、これ以上何かされたら……)

ただ下乳を乗せられて匂いを嗅がされているだけなのに一切抵抗できなくなっている状態で、刺激を与えられてしまふ……。それは確実に敗北に繋がる一手だ。

表面張力を起こしているコップの水。そこへ更に水を注ぐような行為。絶対に避けなければならぬ、今のうちに乳

房を払い除けてしまわなければならない、それはわかっているはずなのだ。

それなのに、俺の心は瑞樹さんのおっぱいを求めるあまり、無抵抗を貫いてしまったのだ。

「ずりり♡ ずりり♡ わかるかなあ？ 私のおっきいおっぱいで、ハヤト君のお父さん似の鼻をパイズリしてあげてるんだよお♡」

「あっ、あああ……」

乳房を左右から手で抑えた瑞樹さんが、谷間に挟まれた鼻をおっぱいで包んで擦り上げる。

決して性感帯ではなく、刺激を受け取るにも小さすぎる鼻という部位。それでもおっぱいで擦られて「パイズリしている」と言われると意識してしまつて敏感になつていく。

「ぱっぱっ♡ ぱっぱっ♡ ずりり♡ ずりり♡ 鼻をパイズリされてるだけなのにおちんちんもビクビクしちゃうね

♡♡ 触られてないはずなのに、パイズリつて聞いただけでおちんちん反応しちゃうね♡」

「あううう……」

瑞樹さんのいう通りだった。鼻をおっぱいで扱かれているだけなのに、ペニス下着の中でフル勃起してびくびくしている。まるで、快感に震えるかのように。

「すりすりすりりり♡ もう抵抗できないね♡ このままパイズリされて負けちゃうおうね♡」

むぎゅつと鼻を乳房で圧迫され、小刻みに擦られる。

乳房と乳房が摩擦することでフェロモンはより強く香り、それを鼻に流し込まれる。そんな状態で鼻にひたすらおっぱいの感触を与えられるのだ。

「あつ、あつ、あつ、あつ……♡」

耐えられる訳が、なかった。

どぴゅっ♡ どぴゅどぴゅっ♡♡ びゅっびゅっ♡♡♡

一切触れられることがないまま、ペニスが限界を迎えた。既に我慢汁で濡れていた下着の中に生温かい白濁液を吐き出してしまふ。それも尋常じゃない量で、陰茎や陰囊に纏わりつくだけでなく下着を突き抜けてズボンにまで達してしまふ。

「あれあれ〜？ 腰がガクガク震えちゃってるけど、どうしたのかなあ？ まさかと思うけど、お漏らししちゃったのかなあ？」

俺の射精を目ざとく感じ取った瑞樹さんに煽られ、ペニスがまたビクンビクンと跳ねる。まるで、直接刺激を与えてもらうことを求めているかのように。

「おっばいに負けちゃったね〜♡ こんな弱くて情けない男の子にはお家も財産も任せられないな〜♡」

もう勝敗は決したから不要と判断したのか、瑞樹さんが俺の顔からおっばいをどかす。吸い付いてくるもち肌も甘い香りも、のしかかってくる重量感も離れていってしまう事に耐え難い名残惜しきを感じてしまふ。

「あ〜あ♡ もうすっかりおっばい大好きって感じのところお目々になっちゃったねえ♡ ママのおっばい、そんなに気に入ってくれたのかなあ？」

「あ、う……。それは……」

顔に下乳を乗せられて鼻をパイズリされて匂いを嗅がされたまま射精してしまった俺は、いったいどれだけ酷い顔を

しているのだろう。

絶頂して脱力し、瑞樹さんを見上げながらへたり込んだ俺の顔が、白い指で捕らえられる。意地悪く笑っているライトブラウンの瞳に見つめられて、もう逃げられない。

「もう一度だけ訊いてあげるね……♡」

に……と目元と口元を歪めた瑞樹さんが言う。

「ハヤト君は、私に出て行って欲しい？ それとも、私とずっと一緒に暮らしたい？」

「そ、それはあ……」

「いいよ、好きな方を選んで。ハヤト君の言う通りにしてあげる♡」

もちろん答えは決まっているはずだ。瑞樹さんを追い出して、父が遺した家と財産を守らなくてはいけなのだから……。

「出て行けって言うなら今すぐ出て行くよ？ でも、ずっと私とこの家で暮らして財産の管理をさせてくれるって言うならあ……、ママになって毎日好きなだけおっぱいで気持ちよおくしてあげる♡」

目の前でわざとらしくぽよん、と揺らされたおっぱいに視線が釣られてしまう。

「私がママになってあげたらあ、まずはぱふぱふだけでお漏らししちゃうようなおちんちんにはおっぱいおむつ履かせてあげるね♡ おっきくてやわらかくいっぱいでおちんちん包み込んであげるから、好きなだけお漏らしぴゅっぴゅしてね♡ もちろん、お父さんの遺産の『有効活用』でママがいないときは、おっぱいの代わりにママのフェロモンが染み込んだお洋服やブラジャーをおむつにしてあげる♡ もちろん、おむつにするだけじゃなくて好きなだけ『おもちゃ』にし

てて良いよ♡ ママが帰ってきたらしっかりおむつを穿き替えさせてあげるから、おっぱいおむつにお漏らしする分は残しておくんだよ♡ でもお……」

魅力的な言葉の数々。顔を包まれるだけで絶頂してしまうほどのおっぱいで直接性器を挟んでもらったり、フェロモンの染み込んだ服や、顔がすっぴり入ってしまうほど大きなブラジャーに包まれながら匂いを嗅いでおむつにお漏らしするのはどれだけ気持ちいいのだろう……。

(こころで、ずっと暮らしたいと答えたら……)

そうしたら、夢のように魅力的な生活を送ることができると。射精したばかりのペニスは、期待ですっかり膨らんで硬さを取り戻していた。

「でもお……、ハヤト君がそんな情けない赤ちゃんじゃなくて、しっかり者の男の人だって言うなら、ママは必要ないよね？？ それなら私はこの家を出て、二度とハヤト君に近付かないよ？」

二度と近付かない……。それはつまり、二度とこのおっぱいを味わうことができないと言うことを意味する。

「ほらほら、どうするのかなあ？ 素直に答えて欲しいなあ♡」

瑞樹さんがニットの从上から自分の胸を揉みしだいて、乳房がもにゅもにゅと形を変える様子や揺れ動く様子を見せつけてくる。

「こーたーえーて♡ ね？ それともお返事もできないくらいバブちゃんになっちゃったんでちゅかあ？」

完全にこちらを舐め腐った言葉さえ、今の俺には興奮剤だった。

瑞樹さんの重くてやわらかい巨乳に負けてしまった俺は、言葉だけでも狂おしいほど性欲を掻き立てられる。

「じゃあ一言答えるだけでも良いよ？ ママって呼んでくれたら、今すぐおっぱいおむつ穿かせてあげる♡ 出て行けて言ったら、出て行ってあげる。これなら答えられるでしょ？」

(今すぐおっぱい……♡)

一度屈してしまった心が破滅に傾くのは、そんな言葉一つで十分だった。

「ま、ママ……♡」

とうとう口に出してしまったその一言。自分の敗北を認め、父の遺志を無為にし、「瑞樹さんとずっと一緒に暮らしたい」と言う意味のその言葉を口にした途端、背徳感と興奮で頭がおかしくなりそうだった。

いや、既になっていたのかもしれない。そうでもなければ、こんなに瑞樹さんと彼女のおっぱいを愛おしく思ったりはしないはずだ。

「あらあら♡ ハヤト君はバブちゃんだったんでちゅね♡ それじゃあお漏らちしちゃっても仕方ないでちゅよね♡

♡ズボンにシミができちゃってまちゅよ♡」

下着を突き抜けた精液が作ってしまったズボンのシミ。ちょうど股間の部分だけが湿って色が濃くなってしまっているのを指摘されて恥ずかしくなる。

「恥ずかしくなくて良いんでちゅよ♡ ハヤト君はママの可愛い可愛いバブちゃんだから仕方ないでちゅよ♡」

恥ずかしいはずなのに、ママにそう言われると興奮するばかりで隠したいとか見て欲しくないとかは思わなかった。むしろ、進んで見て欲しいとさえ思ってしまう。

「バブちゃん、お漏らちしちゃっておちんちん気持ち悪いでちゅよ？ ママがお掃除して、おっぱいおむつ穿かせてあげま

ちゅよ〜♡」

「お、おっぱいおむっ……♡」

やっと直接おっぱいで股間を包んでもらえるのだと思うと、またペニスが限界まで大きくなってしまふ。

「おっぱいおむっ楽ちみでちゅか〜？ それじゃあ、脚を開いてごろんしまちよ〜♡」

「う、うん……♡」

ママの言う通り、背中を床につけて股間をママに曝け出すように脚を開く。

恥ずかしいはずなのに気持ち良くて、腹立たいはずなのに従順になってしまう。

父に色仕掛けをして近付いて、遺産目的で俺に近付いた女。それはわかっているのに、いや、わかっているからこそ、脚を開いて股間を見せつけるような体勢を取るのが極上の快感だった。

「あははっ♡ お父さんの遺産を奪いに来た女に前に寝っ転がってお腹も股間も無防備に見せつけちゃうの、どんな気分でちゅかあ？ ダメでちゅよ〜？ 私みたいなる〜い女の人のことをママって呼んで甘えちゃうなんて♡」

「うう……♡(ん)めんなさい……」

ママの言うことは正しい。まさにその通りだ。それでも、完全に心が屈服してしまっていて、おっぱいを与えてもらう為なら何でもできるようになってしまっているし、やっぱり背徳感興奮をひどく焚き付けてくるのだ。

「良いでちゅよ〜♡ 代わりに、しっかりおむっトレーニングしまちよ〜♡ ママの前以外ではお漏らちしないようになりまちよ〜♡」

瑞樹さんが開いた俺の脚と脚の間で正座をする。そのままズボンのベルトに手をかけてスルスルと慣れた手つきでズ

ポンを脱がしてくる。

「わあ♡ パンツがぐっしよりでちゅね♡ こんなにたくさんお漏らちしてたら、おちんちんイヤイヤでちゅね♡ キレイキレイしてあげまちゅよ♡」

精液でずぶ濡れになったボクサーパンツをママの手でゆっくりと脱がされる。途中、屹立しきったペニスが引っかかってしまったが、結局は容易く全て脱がされた。

そうして、鈴口のギリギリまで包皮を被ったペニスを見られてしまう。

「あら〜？ ハヤト君のおちんちんはごんな子どもおちんちんだっただねえ♡ それならお漏らちしちゃうようなよわよわ赤ちゃんなのも仕方ないね♡」

「うう……」

コンプレックスを煽られ、悔しくなるどころか気持ち良くなってしまふ。完全に心はママに甘える赤ん坊だった。ママの言葉一つ一つが、俺を後戻り出来ないようにずぶずぶと破滅へと導いてくる。

「おちんちんもたまたまもべとべとできちやないでちゅね♡ お漏らちしちゃうってとってもくちやいおちんちん、ママが綺麗にしてあげまちゅね♡」

開脚している俺の足首を掴んで持ち上げ、尻の下に揃えた膝を差し入れられる。

ママの太腿に乗っかって股間を委ねた体勢になると、ゆっくりとママがセーターを脱ぎ始める。

さっきのようなおっぱいの下半分だけまでではなく頭までセーターを通して、ママは裸の上半身を晒した。

「はあい♡ ハヤト君の大好きなおっぱいでちゅよ♡」

セーターを脱ぎ捨てて露わになったママのふくよかなおっぱい。やんわりと垂れた乳房は長く、蕩けそうなほどのやわらかさを見た目にも宿していた。

「ハヤト君がお漏らちしちゃったおちっこ、おっぱいで拭いてあげまぢゅね♡」

そう言つてママは右乳房を上から持つようにして持ち上げて、さっきまで俺の顔に乗せていた下乳でおちんちんを拭き始めた。

「あああっ♡」

「拭き拭き♡ 拭き拭き♡ おっぱいでキレイキレイしてもらつておちんちんも喜んでまぢゅね♡」

女性の身体の中でも至上のやわらかさを持った下乳でおちんちんをにゆるん♡ にゆるん♡ と擦られて、ビクビクと震えてしまう。もっちりとした肌とたつぷりと詰まった脂肪で極限までやわらかくなった半液体のおっぱいは触れるたびに優しく蕩かしてくる。

「たくさんお漏らちしちゃったおちんちんの先っぽ拭き拭きしまぢゅね♡」

にゆるん♡ にゆるん♡ と下乳で皮被りの亀頭と露出した鈴口を撫でられる。キメ細やかな乳肌が僅かに露出した鈴口周りの亀頭に吸い付き、動かされるたびに包皮の縁が軽くめくれるのがたまらなく気持ちいい。

「あれあれ〜？ どうして拭き拭きしてあげてるのにどんどん透明な露が漏れて来るのかなあ？」

意地悪な笑みを浮かべておっぱいを動かし続けるママ。あまりにやわらかすぎる下乳に包茎亀頭は埋まってしまう、竿は乳房の重量に負けてしまっている。

「先っぽばかり拭き拭き辛いでぢゅか〜？ それじゃあ、タママやおちんちんも全部拭き拭きしてあげまぢゅね♡」

一度おっぱいを持ち上げて亀頭と鈴口への刺激を中断したママが、今度はおちんちん全体を根元からカリまでゆっく
り満遍なくおっぱいで撫でる。

「ふわあああ……♡」

ふにゆうん♡ とした感触をおちんちん全体で味わわれ、思わず甘い声が出てしまう。

「おちんちんビクビクさせちゃダメでちゅよ〜？ 拭き拭きしにくくなっちゃって、おっぱいおむつ穿かせてあげるのが
遅くなっちゃいまちゅよ〜♡」

「は、はあいつ……♡」

必死に我慢しようとしても、ふにゆん♡ ふにゆん♡ むにゆ♡ むにゆ♡ と蕩けそうなおっぱいの感触に勝てる
わけもなく、我慢汁を漏らしながらビクビクとおちんちんが震えるのを止めることが出来ない。

勝手に震えてしまうせいで、おっぱいに触れている部分は何度もにゆる♡ にゆる♡ と刺激を受けて快感を感じる。
(何度も続けられたら、また……♡)

自分が再び射精してしまう予感を覚えながら、それを待ち焦がれてしまう自分がいた。

「おやあ？ タママが上がりちゃってまちゅよ〜？ ダメじゃないでちゅかあ♡ そんなにお漏らちしたいんでちゅか
あ？」

「し、したいです……」

ママの質問に、素直に答えてしまう。単純な返事ではなく、「おっぱいで射精させてください」という懇願……いや、情
けない媚びだ。

「したいんでちゅか、そうでちゅか〜♡ ハヤト君は本当にバブちゃんなんでちゅね〜♡」

完全にこちらを見下した歪んだ笑顔で乳房を動かし続けるママ。相手は本当の母親じゃなくて自分を騙してる女だとわかっているのに、おっぱいでもっと気持ち良くして欲しくて無抵抗を貫いてしまう。

「でも、その前にちゃんと全部綺麗にしまちようね〜♡ ほら、タマタマ拭き拭き♡ おっぱいで拭き拭き♡」

白濁液にまみれた陰囊に下乳を乗せられる。半液体のおっぱいは乳肌を陰囊のシワの一つ一つにしっかり入り込んできて、そのやわらかさを主張してくる。

「しっかりキレイキレイしまちようね〜♡」

その状態でおっぱいを動かされ、シワに入り込んでいた白濁液を拭き取られる。

「あううっ♡」

「どうちたんでちゅか〜？ おちんちんじゃなくてタマタマなのに気持ち良くなっちゃったんでちゅかあ？ ハヤト君はよわ〜いマゾマゾ赤ちゃんなんでちゅね♡」

キメ細やかでふよんふよんの乳肌にみっちり密着されてから一気に動かされるのはたまらなく心地良く、本来なら射精に結びつかない刺激のはずなのに快感のあまりに絶頂しそうになる。

（だめだ……♡ もうお漏らししちゃう……♡）

ヒクヒクとおちんちん全体が震え、パクパクと鈴口が小刻みに開閉している。もう間も無く二回目の射精をしてしまおうだろう。狂おしいほどの射精感に脚がムズムズしてくる。

（あと少し、あと少し……♡）

あともう一、あの極上のやわらかさをもったおっぱいで触ってもらえたら射精出来る……。それなのに、ママはおっぱいを離してしまった。

「はあい♡ これでしっかり綺麗になりましたよ♡ 良かったでちゅね♡」

白濁液をすつかり丁寧に拭き取り切ったママが、下乳を持っておっぱいを持ち上げたまま笑う。そのポーズはまるで、「おっぱいはお預け」とでも言うかのようだった。

「約束ならこのままおっぱいおむつ穿かせてあげる予定だったんだけど、ママ、気が変わっちゃった♡」
「えっ……?」

一気に心が空虚な寒さに支配される。よっぽど顔に出ていたのだろう。俺の表情を見た瑞樹さんが、目元と口元を歪めて舌舐めずりをする。

「そんな悲しい顔してどうしたのかなあ? お父さんと自分を騙してお家と財産を奪おうとしてくる悪い女の人に射精まで取り上げられちゃったのがそんなに悲しかったの?」

「うう……はい……♡」

「射精………したいのかな? ママのやわらかいおっぱいでみっちり包んで、にゆるにゆる♡ もにゅもにゅ♡ ってこねこねされて情けなくいお漏らちしたいのかなあ?」

「し、したいです♡ させてください♡」

必死になって媚を売り、おっぱいを求める。それはお腹を空かして泣き喚く乳飲み子と変わらなかった。

「でもおかしいなあ? ハヤト君は私のおっぱいなんか見てない、興味ないって言ってたから、おっぱいなんか欲しくな

いはずだよね？　それどころかお家を出て行って欲しかったくらいなんだもんね？」

「そ、それは……」

急に過去の発言を持ち出されてたじろぐ。

「おっぱいのこと嫌いな子にはおむつ穿かせてあげられない？」

瑞樹さんはわかっているはずだ。いや、もう俺がおっぱいに負けてしまっただかくおっぱいで射精したくなってしまうていることをわかっているからこそこんな事を言うのだ。

「ほ、ほんとうはおっぱい好きです……♡」

「ええ〜？　そうなの〜？　ハヤト君は私に嘘ついてたのお？　そんな悪い子の言うことなんて聞いてあげられないなあ……♡」

瑞樹さんがおっぱいを隠すように腕で抱えてしまう。どんどん遠ざかっていくおっぱいおむつに、心が切なくなつて胸が痛くなる。

「う、嘘ついてました……♡　本当はママもおっぱいも大好きでした♡　ママのおっぱいを見て何度も一人でお漏らししちゃってました♡」

とうとう、ずっと隠していた秘密を暴露してしまう。この数十日の間、心ではどんなに嫌っていたながらも身体はどこまでも瑞樹さんのおっぱいを求めていた。

「じゃあ、しっかり『宣言』して欲しいなあ♡　ハヤト君がママのバブちゃんになっちゃって、このお家もお父さんのお金もハヤト君の将来も、ぜんぶママに管理とせますっていう宣言♡　それが出来たら、ママになってあげまぢゅよ♡」

赤ちゃん言葉に、一気にぞくぞくしてしまう。脳みそが赤ちゃん言葉を使われると何も考えられなくなる。さっきまでずっと赤ちゃん言葉で語りかけられていたせいでクセづけられてしまったのだ。

「素直に赤ちゃんバブバブ宣言できるかなあ？」

言外に「そうでないならもうここで終わり」と言う意味を含めた声でママが言う。

俺の答えは、決まっていた。

「なるっ♡ なりますっ♡ ママの赤ちゃんになって、お家も遺産も全部ママに管理してもらいます♡」

高らかな敗北宣言。絶対に聞かれちゃいけない言葉を、大声で叫んでしまった。

「はい♡ ありがとね♡♡ ハヤト君の赤ちゃん宣言、しっかり録音しちゃった♡」

左腕で乳房を抱えたママが、ジーンズの右ポケットからスマホを取り出す。

「ボタン一つで録音できるようにしてたの♡ これでもう、ハヤト君のお父さんが必死になって守ったお家や財産はぜんぶ私のもの♡ お金目的で近付いてきた女に親子二代で敗北しちゃいまちたね♡♡」

「あ、ああ……♡♡」

口に出して宣言したせいか、完全に身も心もママに屈従してしまった。その証拠に、どんなに悪辣な言葉を吐かれても怒りが微塵も湧いてこないのだ。

「あんなに私の事が大嫌い、敵対心剥き出しだったのにすっかり素直になれまちたね♡♡ あれも嘘だったんでちゅ

ね♡♡ 素直な子には♡褒美あげないといけまちえんね♡♡」

「♡♡ほうび……♡♡」

「じゃ、あ♡」

おっぱいを抑えていた腕を離し、たゆん、と長い乳房を垂らすママ。薄紅色の乳輪と乳頭で白さが際立つおっぱいに、俺の目は完全に釘付けだった。

「おっぱいおむつ穿かせてあげまちようね♡」

「うん♡」

乳房で綺麗に白濁液を拭き取られたおちんちんを包むように、ママが乳房を腰に落とす。そのずっしりとした重量感と下乳の感触だけですぐにムズムズしてきてしまう。

谷間に入られているだけで、まだしっかりと挟まれてもいないのにおちんちんはすっかりお漏らしの準備をしまつている。

「はあ♡♡ これが、バブちゃんが人生も遺産も投げ出してまで欲しかったおっぱいおむつでちゅよ♡」

谷間におちんちんを入れられたまま、むにゅう♡♡ と万遍なく包み込まれる。そのやわらかさと安心感で、いきなり射精してしまった。

「あらあら♡♡ またお漏らししちゃいまちたねえ♡♡ でもいんでちゅよ♡♡ もうハヤト君はママのバブちゃんだから、おっぱいおむつにくらお漏らししても恥ずかしくないんでちゅよ♡♡」

びゅーびゅーと栓を切ったように漏れ出ていく白濁液。そのはずなのに、ママのおっぱいおむつにみっちり包み込まれているからその姿を見ることはかなわない。

結局、射精し切ってもぴったりと閉じられた谷間の隙間から出てくることもできず、全部受け止められてしまう。



※

「ハヤト君、ちゃんと印鑑準備できまじかあ？ 上手にハンコをポン出来たら、オムツかえてあげまぢゅよお〜♡」

「持つてきましたあ♡ だから、早くオムツかえてほしいです♡」

「うんうん♡ いい子でぢゅね♡ 素直なお返事が出来てママも嬉しいでぢゅよ〜♡」

裸になつてオムツだけを穿かされた屈辱的な格好。それも、瑞樹さんが着ていたセーターをぼくの腰に巻いてお尻と股間を包み込んでおむつにしていた。

普通なら考えられないほど屈辱的な格好だが、ママの赤ちゃんになつた今のぼくにとってはそれが正装だった。

「それじゃあ、ハヤト君が上手にハンコをポンできるように、ママが応援ちてあげまぢゅね〜♡」

机の上に置かれた緑色の紙。既に記入済みの印鑑欄に押印すべく、印鑑を手取る。

「よちよち♡ よちよち♡ ハヤト君頑張つて〜♡」

たったそれだけの事をママに応援される。それも、膝立ちになつたママのおっぱいをオムツ越しに押し付けられながら。

「ああっ……ママあ♡」

「どうちたんでぢゅか〜？ ママのおっぱいでおむつスリスリされて気持ちよくなつちやつたんでぢゅかあ？ ダメでぢゅ

よお〜、しっかりポンしまぢゅよねえ♡」

何度も何度もぼくのおちんちんを気持ちよくしてくれてお漏らしを受け止めてくれたもちもぢゅわぢゅわのおっぱい

をすりすりと擦り付けられ、腰が引けてしまう。

「あれあれ〜？ ハヤト君は早くおむつを変えてほしいんじゃないかな？ こんなお洋服のおむつじゃないよ、愛情たっぷりでやわらかいママのおっぱいおむつを穿かせて欲しいでちゅよね〜？」

おむつ越しに、たぶん♡ たぶん♡ ぱふ♡ ぱふ♡ とおっぱいの感触を味わわれる。陰毛を全て剃られて穿かされた紙おむつのくすぐったい感触と合わさって、どうしようもなく気持ちいい。

「おちんちん、おむつの中でビクビクしちゃってまちゅよ〜？ お漏らち我慢できないんでちゅかあ？ またおむつの中で白いぬるぬるおしっこお漏らちして、おちんちんもたまたま汚ちちゃうのかなあ？ そしたらおちんちんとたまたまにドロドロがついてイヤイヤになっちやいまちゅよ〜？」

口ではそんな事を言いながらも、ママはずっとぼくのおちんちんをおむつ越しにズリズリと刺激してきて射精を誘ってくる。ママのパイズリにお漏らし癖をつけられてしまったおちんちんは、我慢汁を漏らしてお洋服おむつを濡らしてしまふ。

「やっ、あっ、ママあ♡ おちっこ出ちやうよう……」

「お漏らち我慢しないでいいんでちゅよ〜？ ハヤト君は赤ちゃんだから我慢できまちえんもんね〜？ ドロドロお漏らちびゅくびゅくしちやっっておちんちんとたまたま汚れちやったら、ママがお手でふきふきちてあげまちゅよ〜♡ ふきふきちておちんちんキレイキレイできたら、ママのおっぱいおむつに穿きかえさせてあげまちゅから、頑張っておむつをポンしまちようね〜♡」

ママの愛情たっぷりおむつ越しパイズリで射精感を煽られ、絶頂に導かれていきながら震える手で判子を紙に向ける。

「ほらほら♡ もうすぐでちゅよ♡ もうすぐでママはずっとハヤト君のそばに居てあげられるようになるんでちゅよ♡ お父さんが遺してくれたお家もお金も全部ママに預けて、一生ママと二人きりのラブラブ親子生活ちまちょうね♡」

「す、するっ♡ ママとずっと暮らすのっ♡」

頭の片隅に残った理性のかけらがやめろと叫んでいるのに、快感と射精感、それから背徳感に後押しされて、とうとうぼくは婚姻届に印鑑を押してしまった。

瞬間、頭がおかしくなりそうなほどの興奮を覚える。決定的な破滅。心臓が爆発しそうなほどのドキドキは背徳感の現れだ。

しかし、それらが全て今のぼくには快樂でしかなかった。

「はあい♡ よく出来まちた♡ ご褒美にお漏らちさせてあげまちゅね♡」

ぎゅっとう腰を抱き寄せられ、たわわな爆乳をむにゅん、と押し付けられておちんちんが圧迫される。

「あああっ♡ ままあ♡」

どぴゅどぴゅどぴゅっ♡ びゅくびゅくっ♡♡ びゅっびゅーっ♡♡♡

その刺激がトドメになって一気にお漏らしをしてしまう。焦らされ続けたちんちんは、お洋服おむつでも吸収しきれないほど濃厚で大量の白濁液を吐き出し続ける。

「これでハヤト君とママはずっと一緒でちゅよ♡ 他の女の子に財産を取られることもなく、ママにだけ管理してもらう為の結婚出来て良かったでちゅね♡ これから毎日、朝は唾液をすすり合うドスケベベロチューでおっきして、その

ママ朝勃ちしちゃったおちんちんを貪欲ねっとりおしやぶり♡ たまたまが空っぽになるまで離してあげないんだから♡
♡ たくさんお漏らちしてお腹が空いたら、ママの手料理をあーんしてあげる♡ 食後のデザートはもちろんおっぱい♡
♡ 授乳手コキでおっぱいちゅうちゅうしながら、たくさんお手手でおちんちんよちよちしてあげまちゅね♡ おっぱい上手に吸えたら愛情たっぷりの親子本気エッチ♡ ママの中で好きなだけ気持ちよくなっていいんでちゅよ♡
夜にはまたご飯食べさせて、お風呂ではおっぱいで全身洗ってあげまちゅね♡ ローションとボディソープを谷間で泡だてておちんちんも洗ってあげまちゅよ♡ 寝る時はママのおっぱい枕に顔を埋めてぱふぱふ♡ ぱふぱふ♡ これからお金が尽きるまで、ママと素敵な親子生活していきまちゅね♡

「うんっ♡ うんっ♡ ママあ♡」

これからのことをママの淫らな言葉で想像させられ、精液がまた少し漏れてしまう。
父さんが遺してくれたお金が続く限り、ママとのエッチな親子生活は続く……。父を失った代りに俺は、たまたまなく幸せな生活と大好きなママを手に入れることができたのだった……。♡

♡いじめっ子のおっぱい誘惑と足コキに負けて言いなり奴隷に堕ちた先生がイジメを隠蔽させられちゃうお話

「んー、ちょっと心当たりがないというかあ、正直なところ『ナニソレ?』って感じでーす。私、全然そんな話知りませーん」
金髪の毛先を指先で弄りながら、目の前の女子生徒がとぼける。

彼女の名は七瀬レイナ。俺が担当する三年六組の生徒で、問題児だ。

全身上から下まで校則違反のオンパレードで、正しく守っているのは学校指定の紺のソックスとローファー程度。例えば、ウェーブを掛けて結ぶことなく流している人工的な金髪。窮屈そうにしている豊満な胸に内側から押し上げられている制服のブラウスは第一ボタンを留めておらず、ネクタイも緩んでだらしが無い。パツチリとした栗色の目はカラーコンタクトで、潤んだ唇にピンクの口紅が塗られている。チェックのスカートは折り込んでミニにして太ももを晒す始末。外見だけでなく素行も悪く、遅刻も早退もせず学校に一日中いることは週に一度あるかないか。授業中に起きていることも少なく、起きていてもノートや教科書を開いていることはほとんどない。

「ねー、本当に私なんにも知らないから帰ってもいい?」

「良いわけないだろう。お前が本当にやったかやってないかだけでもわかるまでは帰せない」

放課後の教室で机一つを挟んで向かい合わせになり、七瀬レイナと二者面談と言う名の詰問を行っていた。三年生の二学期も半ばに差し掛かっているということもあり、予備校や塾で忙しいのだろう。他の生徒の姿は見えない。

そんな中で何故担任である俺がレイナと二者面談など行わなければならないのか。決して進路指導などではない。

そもそも、レイナは推薦入試によって進路を既に確定していた。

「だから、知らないってばー。何ですかー？ 教師のくせに自分の生徒を疑うんですかー？」

「でもな、実際に『お前がイジメを行っていた』って報告があるんだよ」

学級内でのイジメ問題。それがレイナを教室に残して面談を行なうことになった原因だ。

卒業まで僅か半年、というところで一人の女子生徒から『七瀬さんにイジメられているんです』という相談があった。話を聞いてみると嘘をついている風ではなく、その生徒が録音した音声から聞こえてきたのはレイナの罵声。更にはNSでの誹謗中傷や晒し行為などもあり、それも主犯はレイナだろう。

まだ教員になって日が浅く、今年度初めて自分が担任を三年間務めた生徒が卒業する俺としては、トラブルをしっかりと解決して円満に送り出すのが何よりの目標だった。なあなあに済ませるのではなく、きちんと自分のしたことの責任を取らせたり反省を促したりしてから卒業させたい。そこまでやってこそその教育だと考えている。

「えー。誰が言ったの、そんなこと。本当に身に覚えなんかないけど？」

「それを言うことはできない」

被害者生徒のプライバシーへの配慮は勿論のこと、それ以上に話を脱線させない為に口を閉じる。今はとにかく事実確認を優先すべきなのだ。

「それじゃあもしかしたら、私を陥れる為に誰かが嘘をついているのかもしれないじゃん。先生が騙されてるんじゃない？」
有り得ない。と心の中で断言して溜息を吐く。相談してきた女子生徒はレイナと違って成績優秀で素行も問題ない、優等生だ。

更に深く切り込む。完全にレイナを犯人だと決めてかかっていた。一応証拠となり得る録音した音声も預かって持ってきているが、なるべく使いたくはない。まだ録音した本人と自分しか知らない証拠である為、迂闊に扱って盗まれたり破壊されたりした場合、証拠そのものを失ってしまうのだ。

「正直に話してほしい。今なら、最悪でも推薦取り消し程度で済む」

説得以上に、自分の嘘偽らざる本心だった。正直に認めて話してくれば、謝罪と停学、それから推薦の取り消し程度で済む。しかし、ここでシラを切って後日改めて確認した時に本当にイジメを行っていたとわかった場合、反省の態度が見られないとして最悪退学。最低でも卒業式への出席が認められなくなる。

「ここまで一人も欠けずに三年間過ごしてきた担当学級の結末を、そのような形にしたいくはない。生徒の為にも。」「ちゃんと話してくれるなら……」

そこでレイナが信じられない行動を取り、俺は言葉に詰まって固まってしまった。

目の前に座っているレイナが一瞬、ワインレッドのネクタイをピラッとめくって谷間を見せつけてきたのだ。

制服のブラウスの胸元がパツパツと弾けそうになっているほど豊かな、レイナの巨乳。

レイナは第一ボタンどころか第三ボタンまでをあけて、ワインレッドのネクタイで谷間を隠していたのだ。隠されていたおっぱいの谷間。健康的な乳白色の胸の、深々としたスリットを見せつけられて思考が混乱する。



「どーしたの？　せ・ん・せ？　何か見えちゃったのかなあ？」

レイナの纏った芳香と同じように甘ったるい声。それが俺の思考を更に掻き乱し、「え、あ？」と意味のない言葉を吐くことしかできなくなってしまう。

「体調悪いのかなあ？　お顔が真っ赤ですよお？」

レイナはそう言って、再びチラリとおっぱいの谷間を見せつけてくる。制服がキツイのか、乳房がみっちりと密着しているせいで谷間の部分で乳肉が押し合って僅かに盛り上がっている様子が、どうしようもなく扇情的だった。

「お前っ、良い加減に……！」

真剣な話をしている時にふぎけた真似をされて怒りを覚え、怒号と共に机を衝動的に叩こうとする。だがしかし、その瞬間に股間を足で撫でられて力が抜けてしまう。

「ううっ……」

「あはっ♡　真面目な話をしてるんじゃないの？」

金髪の毛先を指で弄りながら、レイナは挑発的な表情で俺を嘲笑う。その間もスリスリと紺のハイソックスで包まれたつま先で股間を逆撫でし続けてきて、心を乱してくる。

「ほらほら、話の続きしようよ。田中さんが推薦を辞退した原因が私だって疑ってるんでしょ？」

スリスリとズボン越しにペニスを爪先で撫で上げるだけでなく、内腿も足先でくすぐられて段々と股間が反応してしまふ。

「私い、じっと足を揃えて座っていられなくって。こうやって足を遊ばせている間は真面目な話もできるんですけど」

ピンク色の潤んだ唇をにや、と歪めてそう話す七瀬レイナ。つまりは「大人しくこのまま弄ばれていけば話してやる」といつことなのだろう。

「くっ……」

仕方なく、俺は席についてレイナの足責めを受けながら話を続けることにする。

「このタイミングで名前を出したってことは、私にイジメられてるって言ったのも田中さんなんだよねー？」

「それは……あううっ……」

言えない。と言葉を続けようとしたところで、爪先でツーツと股間を逆撫でされて遮られる。

「素直になっちゃおうよ？ お互い本当のこと話せば、すぐに解決するってば♡」

ソックスで包んだ足の甲で陰囊を撫で回され、むくむくと股間が膨らみ始める。絶妙な力加減でペニスを足で刺激されるのは、今まで経験したことがないほど気持ち良い。

「それで、どうなんですか？」

足首をくるくると回し、足の裏で股間をこねくり回してくるレイナに、俺は「そうだ」とどうとう言ってしまう。

「やっぱりそうなんだあ。あはっ♡ ありがとう♡ごさいまーす♡」

正直に話したごとのご褒美を与えるように、レイナはつま先を竿に密着させて数回震わせる。電気あんまによってぶるぶると刺激され、ビクンと腰が跳ねてしまう。

「わっ♡ 腰跳ねた♡ 情けなくいっ♡ 大丈夫う？ それで、田中さんは私にどんな風にイジメられてるって言うてたんですかあ？」

「そこまで俺も……うっうっ……」

言えないのではなく知らないという形でシラを切ろうとしたところに、ふみふみと優しく足の裏で圧迫されて力が抜けてしまう。

一日中ローファーを履いていたせいかレイナの紺ソックスの足裏はすっかり蒸れており、その温かさと足裏本来のやわらかさで股間を刺激されると心までほぐれてしまいそうになる。

「知らないならここで話は終わりだけど？ 知ってることを話してくれるならこのまま足で踏んでいてあげるんだけどなー♡」

男の象徴である股間を生徒に足蹴にされる屈辱以上に、巧みな足使いでペニスを刺激される快感の方が強く、俺はこのまま足蹴にされ続けたいと思ってしまう。

(いや、違う……。これはまだレイナにイジメていたと告白させていないから仕方なく……)

微かに残った理性でそう言い訳をして、俺は口を開く。

「し、知ってるっ。話すー！」

「ふふふっ♡ 素直に言えてえらいえらい♡」

再び、レイナは足の先をペニスに密着させたままぶるぶると震わせる。器用なことにズボン越してしかも机の下に隠れているから目視できないというのに、レイナは睾丸には一切触れず肉竿のみに電気あんまをしてくる。そのせいで、一切の痛みは覚えずに心地良い快感だけを覚えてしまう。

腰砕けになって力が抜けてしまうほど心地良いのに、射精には至らない甘美な快感。もどかしさと気持ち良さによっ

て思考がどんどんとろけていく。

「SNSを用いての誹謗中傷や、晒し行為。それから、日常的に罵声を浴びせられたりと……」

「ふんふん。なるほどなるほど」

視線を天井にやり、華奢な指に髪を絡ませて遊ぶレイナ。それが、彼女が考え事をしている時の癖だということを俺はよく知っている。

レイナは「ん〜」と唸りながら考え事をしている最中も絶え間無く足を動かし、こねこねと股間を優しく刺激してくる。俺はその間、レイナがこちらに視線を向けていないのをいいことに自分から座る位置を調節して少しだけ距離を詰め、股間を踏まれやすくする。もうすっかりレイナの足捌きの虜になってしまっていた。

「それってえ、結局田中さんが言ってるだけじゃん？ イジメが事実だとしても、私が主犯なんてわからないし。なんか証拠でもあるなら別だけど」

(証拠……)

あるにはある。田中真穂が録音して、俺に預けた録音機が。そこには確かにレイナの嘲笑と罵声が撮られているのを俺も自分で確認している。

(しかし、その存在を知らなければ……)

上手くいけばレイナにイジメを認めさせることができるともかもしれない。しかし、録音機をこの場で盗まれたり壊されたりする可能性もある。

(どうする……?)

悩んでいる間も爪先ですっとペニスを刺激されているために、思考が上手くまとまらない。射精欲を駆り立てるばかりで実際には射精まで導いてくれないレイナの足コキ。早く射精させて欲しいとも、ずっとこうして気持ち良くし続けて欲しいとも思ってしまうそれに、俺は抗えないでいる。

「そろそろ足疲れてきちゃったなく。もう私帰って良い？」

レイナはそう言うのと足の動きを止め、両肘を机について重ねた手の甲に顎を乗せる。

すると、白いブラウスに包まれた豊満なレイナのおっぱいが、たゆん、と机上に乗っかって強調される。ちょうど腕と机の間の空間を埋め尽くすように収まる胸の大きさに、俺は圧倒されて見惚れてしまう。

「無いんでしょ？ 証拠。それならもうここで話は終わり。私は帰って先生と田中さんに因縁つけられて、大学の推薦が取り消しになりそうってパパに言いつけるから、その後頑張っ♡」

「それは……！」

マズい事になる。このままでは完全にこちらが濡れ衣を着せようとしたことになるし、レイナの父は教育委員会に勤めている。問題が大きくなることは明白だろう。

(なんとかここで、せめてレイナの口からイジメに関わっていることを告白させなければ……)

逡巡の末、俺はどうとう証拠の存在を明かす。

「証拠なら、ある……！」

その言葉を聞いたレイナが一瞬、指に髪を絡ませて天井へ視線を向けた。しかしすぐに視線を俺の方へ戻して興味のないような表情になる。

だが、俺にはその一瞬の反応だけで十分だった。

(やっぱりイジメに加担していたか！)

本当に関わっていないならば驚くこともない。イジメを行っていたからこそ、あるはずがないと思っていた証拠が存在すると聞いて驚いたのだ。

レイナは考え事をする時、視線を上に向ける癖がある。今、レイナは考えたのだ。証拠はどんな物なのか、どれほどの信憑性がある言葉なのか、そしてそれをどう対処するか。

現に、レイナは今「この話無駄だから辞めませんか？」とでも言いたげな雰囲気醸し出して無関心を装っている。本当に関係も関心もない話題ならば「えーっ、すごーっ。なにに？ 証拠ってどんなもの？」と興味津々で訊いてくるはずなのだ。

(伊達に三年間お前の担任をやってきてないぞ……！)

足での股間への刺激が無くなって冷静さを取り戻しつつあった俺は、ほんの僅かな癖からレイナがイジメに関わっていることを見抜いた。後はそれを本人に認めさせるだけ。

「もう一度言うが、証拠ならある。それを他の先生達に知られる前にお前がここで認めてくれれば……」

その時、レイナの目に妖しい光が輝いた。

机の下でレイナの足が俺の方へ素早く伸びてくる。しかし、先ほどまでのように股間へではなく、左の太腿へ。

しまった、と思ってても時既に遅し。ズボンの左ポケットに入れていた録音機は、レイナの器用な足使いで蹴り飛ばされ、カタン、と音を立ててリノリウムの床に落下。拾う間も無くレイナが足で踏みつける。

「考えたんです。証拠って何だろうって」

俺が机の下に潜り込んで拾うことができないように、股間をもう片方の足で押さえつけながら話すレイナ。その声色や様子は先ほどまでのどこかふぎけた所のない、冷たささえ感じるほど静かなものだった。

「SNSのアカウントが私のものであることなんてどうやって確かめようがない。そうなればリアル何かを納めたものはず。写真、映像、音声。まあどれもスマホで事足りる。万が一の可能性としてアカウントがバレていたとしても、やっぱり物的証拠はスマホかな、と」

まるでミステリ小説の探偵が推理を発表するように話すレイナの様子に、俺は自分が追い詰められていることを自覚する。そして、まるでこちらが悪人であるかのようにさえ思えてしまう。

「次に考えたのはその所在。既に他の先生達の手には渡っていたらお手上げだけど、でも今、先生は『他の先生に知られる前に』と言いました。つまり、他の先生の手には渡っていない」

つらつらと、淡々と推理を述べるレイナに、俺は背筋が寒くなる。あの一瞬でこれほどのことを考えていたとは思わなかったし、それができる生徒とも思っていなかった。

「じゃあ職員室の机？ それとも自宅？ いや、先生はそんな迂闊なこととはしないよね。生徒から預かったものは絶対に紛失しないように、何処かに置くことはしないって以前言っていました」

ドンピシャすぎる推理に、背筋が凍りついていく。確かにそのようなことを言った覚えはあるが、まだ彼女が一年生の時に言ったきりのはずだ。

「そして先生は、左ポケットに他人の物を入れる癖がある。私物は右、預かった物は左。生徒から没収したスマホやゲー

ム機も必ず左ポケットに入れてたもんね。三年の付き合いだから、よく知ってるんだよね♡」

やられた……と心の中で舌打ちをする。そして改めて、七瀬レイナという女子生徒の恐ろしさを実感させられる。これまでの洞察力や観察眼を持ち合わせているとは、三年も担任していながら気付かなかった。

しかし、だからと言って諦めるわけにはいかない。むしろ、レイナのこの行動こそが、彼女がイジメの主犯であるという証拠になる。

「こんな事をするって言うことは、やっぱりイジメを行なっていたんだな？」

「さて、それを証明してくれる物はあるのかなあ？」

にやにやと挑発的な笑みを浮かべるレイナに対し、俺は齒噛みすることしかできない。完全に手の内は知られ、頼みの手だった証拠もレイナの足元。これ以上打つ手が無い。

「と・こ・ろ・で・♡ 先生、ずいぶん私の足が気に入っちゃったみたいじゃん？」

「なっ、そんなこと！」

「今更取り繕っても遅いからね〜？ さっき、自分から踏んでもらうために椅子を寄せてたじゃん♡ バレてないと思ってたのかな〜？」

完全に自分の勝利を確信したのか、レイナはまた足で丹念に丁寧に股間をこねくり回してくる。その甘美な刺激に反応して、再び股間は大きく膨れてしまう。

「ほら、あっけなく勃起しちゃった♡ これでもまだ言い逃れできると思ってるんですか〜？」

「そんなところを触られたら誰だって反応するだろ！」

「ふっふっふん？」

にやついた笑みを崩さず、レイナはそつと俺の股間から足を離す。快感だけ与えられて射精まではできていないから一瞬寂しさを覚えてしまう。

「拾って良いよ♡ 大事な大事な録音機。このまま踏み潰してあげても良いんだけど、先生と交渉したいし♡ まだ、使い道もありそうだしね？」

それが録音機のことなのか俺のことなのかは分からなかったが、それでも交渉させてもらえるのならば勝機はある。俺は危険を承知でレイナの足元に落ちている録音機を拾うため、椅子を引いて机の下に潜り込む。

両手と両膝を床について机の下に入ると、紺ソを履いたレイナの綺麗な脚のすぐ近くに録音機が落ちているのを発見する。それに手を伸ばそうとした瞬間、頭上でふぁさつと布が擦れる音して、視線を奪われてしまう。

視線を向けた先、目の前で一瞬はためくミニスカートに、俺は釘付けになる。恐らくは下着まで見えていただろうに、見逃してしまったのを悔やむ。

(な、何を考えているんだ……)

自分がレイナのパンチラを期待してしまっていることに気づき、慌てて冷静さを取り戻そうとする。

「せんせ〜？ まだ見つからないの〜？」

退屈そうな声であくび混じりにそう言うレイナが、今度は足を組む。その時、再びふわりとスカートがめくれる。下着が一瞬見えそうになり、それだけの動作で心が弾んでしまう。

(あ、あとちょっとで見え……)

足を組んでいるせいでスカートの裾が浮き、その奥の下着が見えるのではないかという期待を煽られる。しかし、健康的な太さの白くてやわらかそうな太ももが遮り、ギリギリのところまで奥までは見通せない。

(いや、こんなことをしている場合では……)

いい加減に録音機を回収してしまわなければ……と思ったその時。

「せんせ〜？ お探しのものは見つかりましたか〜？」というレイナの甘ったるい声と共に、白い指でスカートの裾がめくられた。

黒いレースで縁取られた、光沢のある紫色の生地の下着。ギンガムチェックの制服のスカートには到底似つかわしくない色気を漂わせるそれを目にしてしまい、俺は釘付けになって固まる。やっとレイナの下着を目にすることができたという喜びと、予想以上にエロティックな光景で一気に興奮に襲われる。

「くすっ♡ 見つけられたみたいだねっ♡」

その言葉の意味を理解するより早く、レイナは足を上げて紺のハイソックスに包んだ爪先で俺の首を逆撫でしてくる。背筋に甘い震えが走り、「あうう……」という情けない呻き声が漏れる。

「はいっ。目隠し♡」

今度は揃えた両足の裏で顔を覆われてしまう。湿った紺ソのあたたかさに顔中包まれる。

紺ソを履いた足裏は一日中ローファーの中で蒸されていたせいで濃厚な香りを匂わせており、むわっとした汗と革の匂い、それから甘い体臭がいつぱんに鼻に流し込まれる。顔を踏まれているという屈辱感と興奮で頭がおかしくなりそうだった。

(んんん……)

下着を目にしたことで高揚感を覚えていたところへ、悪臭ともつかない癖になる匂いと若い女性特有の魅力的な香りを嗅いでしまったことで脳みそが混乱して興奮で思考が真っ白になる。

「ずっとローファーを履いてると足が蒸れてにおっちゃんでしょ？ だから、コロンを靴下にも吹いておいたんだよね。どうかなあ？ 女の子の匂いと香水、それから足の匂いを嗅がされるのは？ 足で股間をスリスリされて喜んでいた先生にはご褒美だよねー？」

レイナはじつとりと蒸れて湿った紺ソの生地を擦り付けるように、両足の裏を互い違いに動かしてくる。汗と匂いを吸ったソックスの生地は摩擦によって内に秘めた香りを更に放ち、芳しい薫りに溺れてしまう。

「大事な大事な証拠じゃなくて教え子のパンツを探しちゃう先生には、私の足で目隠ししたまま録音機を拾ってもらからね♡」

ムギユツと紺ソを履いた両足の裏を押し付けてくるレイナがそう言って笑う。

「あ、もちろん手で私の足をどかしたらダメだからね？ そんなことしたら先生に足を触られたとか下着を見られたとか、言いふらしちゃうから♡」

退路を絶たれた俺は、レイナの蒸れた紺ソ足裏に視界を塞がれたままリノリウムの床に手をつき、文字通り手探りになって録音機を探そうとする。

「ほらほら先生、そっちじゃないよ？ もっとしっかり探さないと見つからないよ？」

視界だけでなく鼻も口も紺ソ足裏に覆われ、汗でじつとりと濡れている靴下の生地が肌にべったりと吸い付いてくる

せいで呼吸は完全にレイナの足の匂いに染まっている。その状態で必死に録音機を探しているうちに、どんどん頭の中がレイナの香りで埋め尽くされていってしまう。

「私、脚には結構自信あるんだよね。身長は先生に負けてるけど、脚の長さは多分勝ってるよ?」
遠回しに「自分はあなたより生物として優れているんです」と主張され、怒りよりも先に興奮を覚えてしまう。

だんだんと鼻から入り込んでくるレイナの足の匂いにも夢中になり、いつまでもこうしてレイナの足の下で踏まれていたいと思い始めたその時、指先に冷たい物が触れた。

(今のは……!)

確かめるために手を伸ばし、もう一度触れる。指先をなぞらせ、手のひらで包む。

(間違いない。この感触は録音機だ!)

ようやく録音機を探し当てた俺は今度こそ落とさないようにしっかりと握り締める。

「見つかったら足をどかしてあげるから、床をトントンって叩いて教えてくねー♡」

その言葉を耳にして、一瞬身体が固まる。

録音機は既に拾い、俺の手の中にある。後は言われた通り合図をして、レイナに足をどかしてもらって席に戻れば良い。
い。

(でも、そうしたら……)

すっかりレイナの蒸れた紺ソ足裏で顔面を踏みつけられながら靴下に染み込んだ芳香を嗅ぐのに夢中になってしまっていた俺は、足を顔から離される事に抵抗を覚えてしまう。

既にズボンの下でペニスは勃起しており、レイナの足の匂いを吸い込むたびにビクビクと震えてしまう。その震えによって生まれる快感と、足の匂いよって覚える多幸福感から抜け出したいと思ってしまう。

そのせいで、たった二回床を叩いて合図するという簡単なことができずにいる。

(もうちょっと、もうちょっとだけ……)

心の中で言い訳をしてから、鼻で力強く深呼吸をする。湿った布の匂いと汗くささと甘い体臭、それから香水がブレンドされた芳香を鼻腔で味わうように。

吸い込むたびに頭の中を支配してくるレイナの足の匂いにとりと酔いしれていると、唐突に顔から足を離された。

「先生？ ダメだよー、録音機を見つけたのいつまでも足の匂い嗅いでたら。バレてないでも思ってた？」

机の上から聞こえてくるレイナの声で、俺は現実に取り戻される。

ふと見ると、録音機を握っている俺の手は机の天板の外、椅子に腰掛けているレイナからでも見える位置にあった。それに気が付いた瞬間、冷や汗が噴出する。

「私の足が気に入っちゃって離れたくなくなっちゃったよね？ 教え子の蒸れ蒸れ紺ソ足裏の香りは楽しめたかな？？」

挑発するように目の前でムギムギと足指を開閉しながら嘲笑を飛ばしてくるレイナに、俺は強い敗北感を覚えてしまう。完全に掌の上で転がされていたのだ。

「先生が私の足の匂いに夢中になっちゃやう変態さんだって分かったところで、早速本題に入ろっか？ 早く机の下から出てきて席についてよ♡ ほら、『着席〜！』似てたっしょ？」

授業やホームルームを始める時の俺の物真似をするレイナ。その挑発に怒りを覚える気力も湧かないまま、俺は席に座り直す。

「それで、本題って言うのは……」

「先生としては私が田中さんのイジメに関わっていたかどうかが本題だと思うけど、私にとってはここからが大事な話なんだよね〜」

そう言っただけでニツコリと笑ったレイナが、録音機を握って机の上に置かれている俺の左手に手を重ねてくる。

「譲ってくれない？ この証拠。他の先生に渡されたら困っちゃうからさ〜♡ もちろん、タダでは言わないよ？ その分先生にもいい思いしてもらおうからさ♡ だから、お願い♡」

「そ、そんなことできるわけないだろう！ 第一、これを欲しがってことはやっぱりイジメに……」

「あ、うん♡ 私が田中さんをいじめてた犯人。推薦辞退させたのも私。その後もいじめてたのは『脅迫して推薦奪ったの言いつける』とか言ってたから私に逆らったらどうなるかってのを思い知らせるためと、あとはうまくいけば不登校か転校してくれるかなって」

「なっ……」

笑顔を崩すことなく言い放ったレイナに、俺は絶句してしまう。

「今更何驚いてんの？ 先生だって最初から疑ってたじゃん」

「いや、お前はずっと否定して……」

「ここまできたらもう変わらないし？ どうせ証拠は私の物になって誰にもバレなくなっちゃうから♡」

「俺がお前の自白を聞いたって報告すれば……」

「そんなことできるわけないじゃーん♡」

レイナは心底おかしそうに笑ってから、ずい、と机上に乗せた豊乳を寄せて、言った。

「先生は私の言いなり奴隷になっちゃうんだもん♡」

直後、レイナが両足を伸ばしてきてズボンの上から膨らんだ股間を紺ソ足裏で挟み込んでくる。十本の指の付け根で器用にホールドされ、快感で腰が跳ねてしまっても逃げることは叶わなかった。

「ねえねえ先生、この録音機ゆずってよ♡ それで、先生の口から『七瀬レイナはイジメなんかしていない』って説明するって約束して♡ そうしたら、このまま気持ち良く射精させてあげるからさ♡♡」

すりすり、しこしこ器用に足を動かして快感を与えてきながら、レイナは指先で俺の左手の甲に円を描く。

「ああ……。や、やめ……」

「そんなこと言っちゃって、本当はやめて欲しくないのバレバレだかんね？ 足でおちんちんふみふみされたり、たっぷり匂いを嗅がされたりしてすっかり足の虜になっちゃったんだもんね♡」

ムギムギと足の裏で揉みしだくように股間を刺激され、ペニスがどんどんムズムズと疼いてしまう。先ほどから快感を与えられるばかりで一度も射精に至っていないせいで、快樂に対してあまりにも弱くなっていた。

「ほらほら、このままじゃずーっと気持ちいいだけだよ？ 射精できないままなの辛いよね♡♡」

股間の膨らみを足裏で固定したまま、すりすりと擦り付けたり上下に扱ってきたりするレイナの足責め。気持ち良く、自分から股間を差し出してしまっただけなのに絶妙な力加減で射精には至らないそれをまたもじっくりと受け、射

精欲に流されそうになる。

(しかし……この録音機だけは……)

レイナがいじめを認めた以上、証拠となる録音機さえ手放さなければ、彼女に然るべき処分と謝罪の場を与えることが出来る。

俺は決して、レイナを罰したり懲らしめたりしたいわけではない。イジメの件を解決して、レイナと田中真穂の関係を少しでも良好なものにしてから卒業させたいのだ。二人の為にも、このクラスの為にも。

(だから、この録音機を渡すわけにはいかない……!)

力強く左手を握り締め、絶対に渡さないという意思表示をする。この手を離すことは、俺が三年間導いてきた生徒たちの手を離すことと同義。仮に左腕を切り落とされたとしても離すわけにはいかない。

「ふーん？ 結構頑張るね？ それなら、こういうのはどう？」

目を細めてニヤニヤと笑うレイナが、またもネクタイをめぐって豊満な乳房の谷間を見せつけてくる。大きくてやわらかそうな乳房の間に生まれた、深々としたスリット。挑発だとはわかっているのに、どうしても視線はそちらに向いてしまう。

「やっぱりおっぱい見ちゃったね♡ いいよ？ そのままおっぱいに釘付けになっちゃってね♡」

そう言ってレイナはネクタイを扇子のように扇ぎ、俺の方へ甘いミルク臭を飛ばしてくる。

「ふわ……ああ……」

蜂蜜入りのミルクのような甘ったるい香り。それと先ほど足の香りにも混じっていた香水由来の花の匂いがする。嗅い

でいるだけで頭がホワホワとして思考が浮つくそれを、レイナはネクタイをバツバツサと扇いで俺の顔へ浴びせる。

「私、おっぱい大きいじゃん？ だから、谷間を出してそこにネクタイを乗せてると、ネクタイにおっぱいの汗や匂いが染み込んでちゃうんだよね。それに加えてこうやってブラウスと谷間に籠ったおっぱいフェロモンを嗅がせてあげると、ほくら、お目目がとろとろになっちゃってる♡」

ネクタイで扇がれているせいで、レイナの甘い乳房の香りが飛んでくるのはもちろん、チラチラとネクタイが谷間を見せたり隠したりしている。それは誘惑としてはあまりにも魅力的で、自分から吸い込まれるように前傾姿勢になっておっぱいへ自然と顔を寄せてしまう。

「おっぱいにつられて情けない格好になっちゃってるね♡ おちんちんもビクビクしっぱなし♡ 先生が教え子にそんな姿見せて良いの？」

「あうう……」

いけないとはわかっている。しかし、既にたつぷりとレイナに弄ばれたせいでとにかく目の前のおっぱいと足で踏みつけられる快感に流されたいと思ってしまう。

「先生が録音機を私に渡してくれたら、このおっぱいで顔をムギムギ♡ ぱふぱふ♡ してあげながら電気あんまで思い切りイかせてあげますよ♡ おっぱいに包まれながらフェロモン嗅いで、先生の大好きな足で脳みそが真っ白になっちゃおうような射精、経験してみたくありませんか？」

両手で豊満な着衣爆乳を左右から揉みしだき、むにゅむにゅと乳房が形を変える様子や、おっぱいを寄せて谷間の長さを見せてきながらレイナが言う。見ているだけで頭がおかしくなりそうなほど

「お、おっぱいと足で……」

「そうだよ？ それに……今日だけ、じゃないって言ったら？」

机に乗せたおっぱいを鷲掴みにして、まるでパイズリをするように交互に乳房同士を擦り合わせる様子をレイナが見せつけてくる。たゆんだゆん、もちもち、と乳房が密着して谷間が深くなるのや乳肌同士が吸い付きあっているのを見ていると、足で責められている股間がビクビクと反応してしまう。

(あのおっぱいで挟まれたらきつと……) などという、教師が教え子に抱いてはいけない劣情まで覚える。

「田中さんにちゃんくと説明できたら、その時はご褒美にこのやわらかもちもちHカップおっぱいでパイズリしてあげる♡ 私のおっぱい凄くってえ、ナンパしてきた人もパパ活で声かけてきた人も、みくんな夢中になっておっぱいでマゾに堕ちちゃうんだよね♡ 私に気持ちよくしてもらうために命令に忠実になっちゃうの。人生舐めてる女子高生に勝てずに一生底辺這いつくばってお疲れ様って感じ♡」

言いながら足を動かすペースを早め、爆乳を揉みしだき続けるレイナ。今まで多くの男たちを魅了し、一度味わったら抜け出せなくなってしまうであろう魔性の快楽を、自分でも味わってみたいと心の底から思ってしまう。

「すっかりおっぱいに釘付けでパイズリ期待しちゃってんじゃくん♡ ほらほら、録音機を手放しておっぱいにしがみついて顔を入れていいんだよ？ 思いつきりばふばふして天国に連れて行ってあげる♡」

(うう、そ、それでも……)

既に快感と興奮でろくに思考ができていないが、それでも左手を離すことだけはしない。むしろ、その事に全神経を集中させる。他のことは全て今は忘れて、ただ左手を離さないことだけ。

無心になってただ左手だけを意識したおかげで、視線はレイナの胸から離れて左手のみを見つめている。このまま冷静さを取り戻していけば足責めも気にならなくなるはず。

そう思った矢先のことだった。

「えーいつ♡ おっぱいドーンっ♡」

一瞬、何が起きたのかわからなかった。全神経を集中させていた左手が何かによって隠されると突如、重たくてやわらかい、タプタプもにゅもにゅの感触が襲ってきたのだ。

「そんなに手を開きたくないなら、私のおっぱいで押さえておいてあげる♡」

「お、おっぱい……♡」

「そ♡ 現役女子高生のHカップおっぱい♡ 柔らかいでしょ♡ 右手は揉ませてあげるね♡」

レイナはそう言うのと空いている俺の右手首を掴んで、豊満な乳房の上に掌を乗せさせる。

「あっ、あっ、やわらかっ……♡」

「でしょー？ 私のおっぱい、一揉み一万円って言っても揉むのやめられないでボーナス全額払っちゃう人がいたくらいなんだよねー。ほら、先生も勝手に手がおっぱいもみもみ始めちゃってる♡」

ブラウス越しだというのにレイナの乳房は極上の揉み心地で、一度揉み始めたら手を止められなくなる。

下着をつけていないのか、乳肉はもにゅんもにゅんと指の隙間からたやすくこぼれそうになり、そのくすぐったさに脱力してしまう。

脂肪がたっぷり詰まったレイナのおっぱいは、揉むと指の隙間から逃げようとするほど軟らかいのにしっかりと弾力が

あり、沈んだ指先や揉みしだいている掌を跳ね返そうとしてくる。

「うわっ、ああ……」

「ぶっ♡ 教え子のおっぱい揉みながら情けない声出しちゃってる♡ ふわふわなのにもちもちのおっぱい、ずっと揉んでると手がとろけてきちちゃうでしょ？」

レイナの言う通りだった。簡単に指が沈み込む柔乳によって右手が全て包み込まれ、指の隙間さえ乳肉に埋め尽くされる。かと思えば弾力によってふよんと優しく押し返されて、自分の意思でおっぱいを揉んでいるのか、おっぱいによって右手を動かされているのかわからなくなる。

（あああ……おっぱいすげいい……♡）

乳房の感触で与えられる多幸福感と快感で右手が溶けておっぱいと一体化してしまったかのように感じる。最早自分の意思で右手を止めることはできず、ただ胸を揉んで足で股間を踏まれているだけで絶頂してしまいそうだ。

本来なら胸を揉むことは女性に対する愛撫であり、揉んでいる男の方が快感を覚えることはないはずのだが、レイナのもあまりにもやわらかくて弾力たっぷりな極上の乳房は揉んでいるこちらに快樂を与えてくる。

（ああ……頭、おかしくなるう……♡）

一揉みするごとに脳みそが溶けているかのような多幸福感を覚え、俺はもう止められなくなった右手で感じるふわふわもちもちの爆乳の感触に溺れることしかできなかった。

「あれあれ？ 先生の左手もムズムズ動き始めちゃったねー？ そっちでもおっぱい揉みたくなっちゃったのかなあ？」

レイナの言葉によって初めて気が付く。彼女の大きなおっぱいの下に押し込まれている左手が、右手と同じように

こびこびと動いている事だ。

しかし、握りしめているのは冷たくて硬い録音機。その虚しさにも、急に一つの疑問が浮かんでしまう。

——どうして、こんなものを持っているんだろう。

左手でも右手のようにレイナの胸を揉みしだきたい。ふわふわでとろけるほど柔らかかで、揉んでいるだけで歯の根がむず痒くなってくるおっぱいを両手で味わいたい。

(揉みたい……レイナのおっぱいを思い切り……)

「はい、ストロップ。もう右手でおっぱい揉むの禁止ね」

そう言っただけでレイナが俺の右手首を掴んで乳房から離す。離れてもなお、爆乳の極上の揉み心地を求めて右手はわきわきと動いてしまう。

「うわっ、めっちゃくちや情けない顔してるー。おっぱい取り上げられて泣きそうな顔するとか赤ちゃんじゃん。どうちたんでちゅかー？ おっぱいがないないされて寂しいんでちゅかー？」

「さ、寂しいっ……！ もっとおっぱい揉んでいたい！」

先ほどまで与えられていた爆乳の感触と多幸福感がなくなると、まるで麻薬が切れた禁断症状のように激しくおっぱいを求めてしまう。冷静さを取り戻そうにも、絶え間なくじわじわと足で股間に刺激を受けているせいで思考がまとまらない。とにかく射精することとおっぱいを味わうことしか考えられないのだ。

「あはっ♡ それなら左手で揉めば良いじゃん♡ ほらほら、おっぱいの下敷きにされちゃってる左手で下乳鷺掴みにしてみ？ 女の子の体の中で一番やわらかくて気持ち良いところ触りたいでしょー？」

(一番やわらかくて気持ち良いところ……♡)

手の甲にのしかかり、左手を丸ごと包み込んでいるレイナの下乳は確かに得も言われぬ感触で、これを驚掴みにして揉みしだいたらどれほど気持ち良いのだろう……と思わずにはいられない。

(ああ……でも、録音機が……)

おっぱいを揉みたくて仕方がないのに、手中に収めている機械が邪魔をして揉むことができない。これさえ手放せるのなら……いや、手放したら……と苦しい葛藤を味わう。

「おっぱい揉みたいんでしょ？ いいよ、我慢しなくって」

乳房の上に手を置いたレイナが、ムギユムギユと下乳を左手に押し付けてくる。もにゅんもにゅんと乳肉が動いて包み込んだまますぐられる快感に、自然と左手を開きそうになる。

(は、離したい……おっぱい揉みたい♡)

レイナの誘惑に屈しておっぱいを揉みしだきたいという抗い難い衝動を、僅かに残った理性の糸で押さえつける。

そんな俺の様子がよほど滑稽だったのか、レイナは目を細めてニヤニヤと笑う。

「へえ、先生ケッコー頑張るじゃん♡ 私のおっぱいを揉ませてあげて足コキまでしてるのにここまで堕ちない人初めて。そんなに頑張られちゃうと、こっちもやる気出てきちゃうよね」

乳房の上に乗せていた手をブラウスのボタンへと運んだレイナが、一つ、二つ、とボタンを外していく。

そうして、とうとう乳白色のおっぱいがほとんど露わになる。乳先は辛うじてブラウスによって隠されているが、上乳も谷間も思い切り見せるつけるように晒していた。その谷間の長さに、俺は息を飲んでしまう。

飲んだ息と共に鼻に入り込み、むわん、と香る甘い匂い。ブラウスの中に閉じ込められていたレイナのおっぱいフェロモンが漏れ出し、誘うようにあたりに漂い始めたのだ。蕾が開いて花が虫を誘う芳香を薫らせるように。

「それならさあ……このおっぱいの中に飛び込んできていいよ♡ 私のおっぱいで先生の顔包み込んで何も考えられなくなるくらい幸せにしてあげたら、何も考えなくていいじゃん♡ 罪悪感も責任感も全部忘れておっぱいで幸せになっちゃおう♡」

人差し指と中指を長くて深々とした谷間に差し込んだレイナが、グイッと乳房が密着しあっている谷間を広げて見せつけてくる。蒸れて血行が良くなった乳肌は淡い桜色に染まっており、余計に情欲を掻き立ててくる。

「ここで私の言うこと聞いて協力してくれるって言うなら、卒業するまでいつでもおっぱいで幸せにしてあげるよー？ 私の言いなりになる代わりにぱふぱふもパイズリもしてあげる♡ 先生が大好きな足コキだって、今日みたいな焦らすのじゃなくて、本気で搾り取るやつしてあげるよ♡」

そこで言葉を切ったレイナが、指を谷間から抜く。乳肉のたつぷり詰まったおっぱいはすぐに元の形を取り戻し、むにゅん、と谷間の線がたわむ。

「だからさあ……おっぱい揉んで飛び込んできちやいなよ♡ お顔を包まれてとろけた脳みそにおっぱいフェロモン染み込ませて一生抜け出せなくしてあげる♡」

口元を歪めて笑うレイナの誘惑に抗えず、俺は、とうとう左手を開いて録音機を机に置いてしまう。

「くふっ♡」

俺が録音機を手放したことを悟ったレイナが微妙におっぱいを持ち上げる。俺はその隙間の中で手首を返し、左手で

持ち上げるように下乳を揉みしだく。

「ああっ、やわらかっ♡ やわらかいよお♡」

「くふふっ♡ 大事な大事なショコラを捨てて、おっぱい揉んじやったねー♡ 教育者失格のおっぱいマゾ♡ でも仕方ないよね、男ならどうやっても私のおっぱいには勝てないもん♡」

勝利を確信した誇らしげな笑みを浮かべるレイナが、俺の右手をおっぱいへと引き寄せ、更には椅子も寄せて足裏を力強く肉竿に押し付けてくる。

「ほらほら♡ もう何も気にすることなんかないんだからおっぱいに潜ってきていいんだよ♡ ぱふぱふしてあげてる間もずーっと電気あんましてあげてるから好きなだけ射精しちゃいな♡」

両手でレイナの爆乳を鷲掴みにして揉みしだき、完全に我慢ならなくなる。両手が溶けて無くなってしまいそうなほどやわらかな柔乳。そのくせ下乳を揉んでいる左手にはずっしりと重量感を伝えてくるのが、おっぱいの存在感をこれでもかと味わされる。

（あっ、あっ、おっぱい♡ おっぱい♡）

頭の隅に一片ほど残っていた理性が、音もなく崩れていくのを感じる。今の俺はもう教師などではなく、レイナの魔性の爆乳に魅了された哀れな雄でしかない。

「揉んでいるだけでいいのー？ 好きなようにして良いんだよ？ ほうら、おっぱいに自分から顔を近付けて挟まりに来たらあ、天国見せてあげる♡」

「と、飛び込むっ♡」

自分の手でレイナのおっぱいの谷間を開く。あまりに大きくて重たいおっぱいは力を入れないと開けず、乳圧の高さをそれだけで伝えてくる。

そうして開いた谷間からもわん、と立ち昇る爆乳フェロモンに誘われるように、俺は机に身を乗り出して顔面を乳房の間に挟ませる。

「あああ……♡」

しっとり滑らかな肌触りの乳房に顔面を包み込まれ、思わず感嘆の声を漏らしてしまう。もちもちの乳肌は頬に吸い付いてきて、まさに夢見心地。一生このままおっぱいに溺れていたいと心から思ってしまうほどだった。

「はい♡ おっぱいに一名様ごあんない♡ おっぱいで脳みそシェイクされて壊れちゃえ♡ ぱふぱふ♡ ぱふぱふ

「♡」



俺の頭ごと爆乳おっぱいを抱え込んだレイナが、ムギユムギュと左右から乳房を押し付けてくる。谷間に挟み込まれている顔に、波打つ乳肌が擦り付けられる。

(ああっ♡ おっぱいすきい……♡ おっぱいで頭おかしくなる……♡)

ぽよんぽよん♡ むにゅむにゅ♡ と乳房が形を変えるたびにフェロモンが香りたち、鼻腔に流し込まれる。自分から誘惑に負けて真っ白になった頭の中がレイナのおっぱいフェロモンによって染め上げられる思いだった。

「先生やっぱ顔を潰されるの好きだったんだねー♡ さっき足で顔を踏みつけた時も良い反応してたし♡ 顔を潰されて喜ぶとかどうしようもないマゾじゃん♡ 女子高生様に勝てないマゾのくせに教師やってるとか生意気なんじゃないですかー？ ほらほら、なんとか言ったらどうなんですかー？」

「あっ♡ あっ♡ マゾですう♡」

顔を挟み込んだまま、レイナがたゆんたゆんとおっぱいを揺らして顔面を乳房でもみくちやにしてくる。甘い香りを放つおっぱいに溺れているようで、ドバドバと脳内麻薬が溢れて多幸福感に満たされる。

(おっぱいすきい♡ レイナのおっぱいすきい♡ ずっとおっぱいにおぼれるのしあわせえ♡)

「うっわ♡ ちんこずーっとビクビクさせてんじゃん♡ さっきまではそこそこ我慢強いなーって思ってたのにはふふふしてあげただけでこんなに情けなくなっちゃうんだ♡ もっと深いところまで沈んできていいんだよー？ 田中さんを裏切って私の言いなりになったご褒美♡」

抱え込む力を強められ、ふわふわの柔乳にずぶずぶと沈められる。顔面だけでなく顔を丸ごとおっぱいに挟まれ、耳や顔の輪郭にぶにゅぶにゅの乳肌の感触を覚えるのがくすぐったくて心地良い。

「先生の幸せは私のおっぱいに負けることだってちゃんと覚えちゃおうねー♡ 生徒のこともクラスのこともどうでも良くなつて、私に気持ち良くされるためだけにお仕事頑張れー♡ ぱふぱふ♡ ぱふぱふ♡」

左右から爆乳にこねくり回され、乳房に頬や鼻が沈むたびにペニスが硬くなつていく。ずっと踏みつけられていたせいでもうすっかり快感にほだされてしまっている愚息をレイナの足裏に自分から押し付けてしまおう。

「カクカク腰動かしてんのキツモお♡ 自分から必死になって蒸れ蒸れの紺ソ足裏にちんこ擦り付けて気持ち良くなるうとしてんの情けなさすぎない？ それともマゾの先生はそれが幸せなんですかー？」

「ひ、ひあわせれすっ♡」

無様に腰を振ってレイナの爆乳に包み込まれているだけでどんどん興奮が高まり、屈射精欲がむくむくと湧き上がってくる。もうこれから先どうなつてもいいからとにかく精液をぶちまけて快楽に浸りたくてたまらない。

「ふーん？ 完全に屈服しちゃったんだー？ それじゃあおっぱいの中で思い切りマゾ宣言して田中さんに謝りながら射精しちゃえっ♡ ぱふぱふ脳みそシェイクしたまま思いつきり足を震わせて電気あんましてあげてるから一生私の奴隷になりますって言って敗北射精しろっ♡」

おっぱいごと頭をしっかりとホールドしたレイナが、もにゅもにゅん♡ むぎゅむぎゅ♡ とおっぱいを激しく揺らして快楽の中でもみくちやにしてくる。

蒸れて汗が染みた紺ソ足裏はじつとりとズボンの上から肉竿に張り付き、一分の隙間も作らず密着してきてぶるぶると震える。ペニスだけでなく恥骨まで刺激してきて睾丸を揺さぶる電気あんまに、俺はもう一瞬も耐えることが出来ない。

「イっちゃえイっちゃえ♡ 生徒を裏切って気持ちよくなっちゃうことごめんさいしながら教え子のおっぱいと足裏に屈
從射精して脳みそ壊れちゃえっ♡ ポンコツ頭のゴミマゾ教師だって自分で認めながら射精するの、一生忘れられない
くらい気持ち良いよーっ♡」

「じ、自分はあつ、生徒を裏切ってレイナ様のおっぱいと足に敗北射精するゴミマゾ教師ですっ♡ ああっ♡ 足激しく
されるの気持ちいいですっ♡」

自分で自分を貶める言葉を吐きながら快樂に身を任せると強烈な多幸福感が生まれ、射精の代わりに言葉がつつら
と吐き出される。惨めで情けない姿を自分から晒すのはとてつもない快感で、脳みそに癖をつけられて本当にバカにな
ってしまふ。

「イク時はちゃんとごめんなさいしようねー♡ 田中さんに謝ってる無様な姿見ながら笑って踏みつけてあげる♡」

「ごめんなさい♡ ごめんなさい♡ 俺にイジメの相談してくれたのにごめんなさいっ♡ イジメやクラスのことよりも
おっぱいと足で気持ちよくしてもらう方が大事になっちゃって射精しますっ♡ レイナ様の言いなり奴隷になっておっ
ぱいと足に服従しますっ♡」

頭がどうにかなりそうなほどの興奮の中、破滅の言葉をおっぱいの中で叫び続ける。怖いほどの心臓の鼓動が興奮や
快感と結びついて脳味噌を壊していく。

じゅぽぽぽぽっ♡ じゅぽぽぽぽっ♡♡ じゅぽぽぽぽぽぽぽぽぽっ♡♡♡

言い切った直後、それまで焦らされていた分思い切り白濁液を吐き出す。下着の中を満たして肉竿も陰囊もびちゃびちゃに浸すほど大量の射精。その余韻に酔いしれていると、ほわほわとした感覚の中で脳みそが作り変わっていくのを感じる。

「うっわ、靴下汚れないようにズボンの上から踏んでたのにちよつと濡れたんですけど。出し過ぎでしょ。私の爆乳に顔潰されながら足コキされるのそんなに気持ち良かったんだあ？」

「き、気持ちよかったですう……♡」

射精してもなおビクビクとペニスは震え、もっと踏んで欲しいとせがんでしまう。心地良い射精の余韻の中でレイナ様の誘惑に抗えず、快楽に完敗したという事実を思い知らされるのはこれ以上ない幸せだった。

「はい、じゃあお疲れ様ー。私は帰るから適当に先生も帰っていいよ。ちゃんと田中さんには説明してね？ 『七瀬レイナはいじめをしてない。田中真穂の勘違いということこの件は終わり』って。さっきの先生の言葉、しっかり録音しておいたから逃げてても無駄だかんね」

そう言い残してレイナ様は俺をやわらかくてあたたかいおっぱいの中から出し、椅子を引いて立ち上がって教室を後にする。

「あ、この靴下もう要らないからあげる。生徒の紺ソの匂い嗅ぎながらシコって今日のことすっかり覚えちゃってねー」
出る間際、レイナ様は右足の紺ソックスを脱いで丸め、俺の方へ投げてきた。

「じゃあねー。田中さんに説明する時は呼んでね。見張ってあげるからさ♡」

投げつけられた紺ソを顔で受け止めた俺は、誰もいない教室で一人、レイナ様の靴下の匂いを嗅ぎながら自慰に浸る

のだった。

※

「失礼しま……す……」

弱々しい言葉と共に教室の扉を入ってきた、黒髪ショートの子生徒。

「あ、ああ田中か。よく来てくれた。まあそこに座ってくれ」

あれから数日後、田中真穂にすっかりといじめの件を説明するために教室に呼び出していたのだ。

呼び出された田中真穂は教室に入るなり表情を険しくし、少しの間固まってから俺の右斜めの席に座る。

無理もないだろう。今、同じ教室には七瀬レイナも存在し、俺の左斜めの席……つまり田中が座った席の隣に居るのだから。

「あの、これってどういう……」

状況が飲み込めていないのか、訝しんだ様子の田中が席につくなり疑問を口にする。

「あ、ああっ……ええとっ……。ふ、二人に、ち、ちゃんと話そうと思って……」

「センサー？ 大丈夫ですかあ？ ちゃんと話してくださいよー」

ニヤニヤと挑発的な笑みを浮かべながら、机の下で田中に見えないように俺の股間を踏みつけてくる。

踏みつけられている俺の股間はこの間と違ってチャックから露出しており、蒸れて湿った紺ソの生地とレイナ様の足裏

の感触をダイレクトに与えられる。

田中に見つからないようにレイナ様から足コキされている興奮と背徳感で頭がおかしくなりそうになりながらも、必死に堪えてなんとか説明を続ける。このまま隠し続けるのではなく、いつそ自分から暴露した上でレイナ様の足に自分から腰を振ってペニスを擦り付けたらどれだけ気持ち良いのだろう……という破滅的な期待を抱いてしまっていた。

そのせいで、声の上擦ったり言葉が出なくなったりしてしまうのだ。

「そ、それで……あの件は……」

しかし、田中は自分をいじめていた相手の隣に座っている緊張感といじめの件がどうなったのかへの関心からか、俺の不審な様子には気付かない。

「そのっ、お、お前の話してくれた件なんだが、ああっ……」

「私が田中さんをいじめたり、推薦枠を奪うために無理矢理辞退させたって話だよなー？ どうなったんですかー？」
「けらけらと笑いながら、グリグリとペニスを踏みつけてくるレイナ様。その足捌きと表情から、言外に『早く教えてあげなよ♡』というメッセージを受け取る。」

「な、七瀬のイジメは、ああっ……。認められなかった」

「えっ？」

予想外だったのか、田中は目を丸くして固まってしまう。

「そんな説明じゃわかってないみたいだよー？ もっとはつきり、わかりやすく言ってあげなきゃ♡」

紺ソックスを履いた爪先でムギユツと亀頭を包み、踵をグリグリとペニスの付け根に押し付けながらレイナ様が催促し

てくる。恐らくはこれも田中真穂へのいじめの一環で、彼女が絶望したり泣き出してしまうのを楽しみにしているのだろう。

その目論見を理解していても、心が既にレイナ様に屈従してしまっているのと足責めによって与えられる快感があまりに完備なので抗うことはできない。

「い、イジメは、あぁっ……なかった。七瀬は、お前をいじめていないと言っていたし、俺の方でも、これまでの件は七瀬が関わっているとは断言できない……」

「そんな……だって先生、ボイスレコーダーだって渡したじゃないですか……」

「その音声も、七瀬のものとは決められないし、うっ……そもそも、イジメとして認められるような行為の証拠は何もなかった」

「だって……だって……」

悔しさが、絶望からか、田中は目に涙を溜めながら必死に言葉を紡ごうとする。

「そうそう、それでさー。田中さんが嘘ついて私をいじめの犯人にして推薦取り消しや退学に追い込もうとしたーってパに言いつけちゃったんだよね」

すりすり、すりすりと蒸れて湿った紺ソ足裏で肉竿を摩擦しながら、レイナ様が田中真穂を追い込む。

「そ、それがなんだって言うんですか？ 私別に、悪いことなんて何もしてないのに……」

「それが何になっちゃったんだっけ？ センセー？」

「こ、今回の田中の虚偽の報告こそ重大ないじめと判断して、あ、あうう……♡ 田中を無期停学処分とすることが、

ううっ♡ 学校の規定で、あっ♡ 決定……した。あっ♡」

その言葉を口にしたことで興奮がピークに達したせいか、その後どのような会話があったかは覚えていない。気が付けば教室には俺とレイナ様の二人だけ。

しかし、「だって……だって……。先生、力になってくれるって言ったのに……信じてたのに……」というすすり泣きのような言葉は、耳に残っていた。

「お疲れさまー。最後に泣いてたあの子の顔、最高に笑えたから堪えるの大変だったよー。先生も射精堪えるので大変だっただろうけど」

そう言ってレイナ様が机の上に腰掛ける。その時わざとスカートの裾をはためかせ、真っ白の太ももと黒い扇状的な下着を一瞬見せつけてきたせいで、俺はもう我慢ならなくなる。

「レイナさっ、レイナ様あっ♡ め、命令通りにしたのでっ♡」

「あー、はいはい。おっぱいと足で思い切り潰されたいんでしょ？ いいよー、面白いもの見せてもらえたし面倒なこと無くなったしで気分良いから♡」

机上に座ってこちらを見下しているレイナ様が俺の股間を紺ソ足裏で強く踏みつけてくる。その心地良い圧迫感によって、とびゅ、と我慢汁を漏らしてしまう。

「それにしてもさー、生徒に真面目な話してる時にちんこ丸出しにして女子に踏みつけられているとかヤバイでしょそれともマゾだからドキドキしちゃったかなー？」

「ああっ、し、しましたあ♡」

田中に見えないようにしながらレイナ様の足で丸出しにしたペニスを扱かれているのはあまりに背徳的で、完全に俺の理性を破壊していた。

「はい、それじゃあまた私のおっぱいの中でごめんなさいお漏らししようねー」

足でグリグリとペニスを踏みつけながら、レイナ様は慣れた手つきでブラウスのボタンを一つずつ外していく。

「はい♡ センセーの大好きなおっぱい♡ 飛び込んできていいんだよー♡」

そうして眼前に現れた豊満なおっぱいに、自分から飛び込んでしまう。

「あうう……♡ レイナ様のおっぱい……♡」

呼吸に合わせて上下に振れながら、甘くとろけるフェロモンを香らせるレイナ様のおっぱいに飛び込んで顔を乳房で挟まれる。脳みそが一気に多幸福感で満たされ、ヘコヘコと情けなく腰が動いてしまう。

「ほんっにおっぱいで顔潰されるの大好きだよねー。谷間に入れてあげただけなのにさっきまでより硬くして、自分から足の裏に擦り付けてきちゃってんじやん♡ 弱すぎでしょ♡」

俺の情けない腰振りに合わせて、レイナ様は足を前後に動かして爪先から踵までを使ってペニスを摩擦してくる。踏みつけられる圧迫感と前後に扱かれる快感でどんどん射精欲を覚えてしまう。

「お？ もうちゃんこ震えちゃってんじやん♡ 足とおっぱいだけでこんなにすぐ負けそうになるとか、家でどんだけ私の靴下でシコってたらそうなるわけ？」

ぱいぱい♡ ぱいぱい♡ と左右から乳房で包まれ、圧迫されて快楽に溺れそうになりながら「一日五回してました♡」と答えると、レイナ様は心底愉快そうに笑った。

「やっぱあ♡ 生徒の靴下の匂い嗅いで毎日五回もシコるとか、終わってんじゃん♡ ま、センサーの人生終わらせちゃったのは私だけどー♡」

乳房を巻き込みながら俺の顔をむぎゆううつと抱き締めたレイナ様が、足の動きを激しくしてくる。爪先で前後にペニスを扱かれ、滑らかな感触と毛羽立ちが合わさった紺ソの生地でカリや竿を刺激されていると精液がせり上がってくるのを感じる。

「ほらほら射精しちゃえっ♡ いじめを隠蔽した上に生徒を無期限停学に追い込んだこと謝罪しながら苦渋の証の精液漏らせっ♡」

その言葉が引き金となって凄まじいほどの罪悪感と、それを超えるほどの興奮を覚えてしまう。そうなるともう口を止めることはできなかった。

「ごめんなさい♡ じ、自分はあ、イジメをなかったことにした上に、被害者を停学に追い込んだ最低の教師ですっ♡ レイナ様の足とおっぱいが気持ち良すぎて他の生徒がどうしても良くなっちゃった教育者失格マゾですっ♡ ごめんなさい♡ ごめんなさい♡ レイナ様に忠誠を誓いまーすっ♡」

どびゅるるっ♡ びゅるるっ♡♡ びゅびゅびゅびゅっ♡♡♡

「うわ、また靴下にかかったし。しかも今度は思い切りぶっかけられた。なに？ また靴下欲しくてマーキングしちゃった？」

「あああ……申し訳ありません……」

強すぎる興奮と快楽に射精をコントロールできなくなり、レイナ様の足裏だけじゃなく爪先や足の甲にまで白濁液を撒き散らしてしまったことをおっぱいの中で詫びる。やわらかくて吸い付いてきて押し潰してくれるおっぱいから自力では離れられないほど、俺は服従してしまっていた。

「亀頭踏みつけても射精止まんなかったし……。あはっ♡ まあその情けなきに免じて許してあげるけど。サイコーに無様で面白かったよー、センチ♡」

胸の谷間から俺の顔を離れたレイナ様が、一瞬天井の方へ視線をやる。

「私そういえば他にもイジメてた生徒いた気がするんだよねー。あ。それから教科担の先生とかもイジメちゃってるかも♡ これから卒業するまで学校生活いろいろあると思うけどさあ、いじめをなくして楽しい思い出作っていこーね♡」

笑顔で言い放つレイナ様に、俺は頷いて答える。

……俺が教師を志したのは、高校生の頃に助けてくれた先生に憧れたからだった。

いじめを許さず、生徒のことを分け隔てなく思いやり、子ども達を正しい道と明るく未来へ導く熱血教師。そんな先生に俺もなりたいと思っていたはずだった。

これから、いじめを揉み消したり被害者を逆に貶めたりしていく度に、レイナ様に謝罪射精させてもらえる。それは、俺が憧れていた先生の姿や思い描いていた理想像とは真逆のものかもしれない。教師でありながらレイナ様に服従し、教え子の前で股間を晒して豊満な乳房に挟んでいただけのように懇願する姿は非常に情けないものだろう。

レイナ様の乳房のやわらかさやフェロモンの甘い香りを知ってしまった俺は、彼女の深い谷間の中にペニスを仕舞い込

まれて快感に喘ぎ、屈従の証を吐き出すことだけを目的にして今日も教壇に立つ。

それは、どんな想像よりもずっと、素晴らしい学校生活であるに違いなかった。